筑波大学新聞

第279号
編集責任
筑波大学新聞
編集委員会
委員長　荻野祥三
TEL：029(853)2040・6699
E-mail
shinbun@sakura.cc.tsukuba.ac.jp
月　刊

発行所
筑波大学
茨城県つくば市
天王台1－1－1

グローバル30

本学が拠点大学の一つに採択

「国際性の日常化」目指す

文部科学省は7月3日、「国際化拠点整備事業（グローバル30）」の拠点大学の一つとして本学を採択した。この事業は、留学生の受け入れ推進や日本人学生の海外派遣の強化などを通じて大学の国際化を目指すもの。

拠点大学となる条件は、英語で行われる授業で学位取得が可能な教育環境、留学生受け入れ体制が整っていること、海外拠点が設置してあることなど。22校が申請し、本学の他、東京大学や京都大学、慶應義塾大学など13校が選ばれた。拠点大学は整備を進めるにあたり、国から5年間財政支援を受けられる。

本学は国際化拠点構想の中で、果たすべき役割として①高い研究レベルに裏打ちされた知の蓄積②国際的なリーダーとなる人材の育成③地球的規模の課題に対する解決策の提示と設定。筑波研究学園都市に根ざした特色ある国際化、国際性の日常化を推進する。

達成目標としては、留学生の数（5月時点で15222人）を、11年後の平成32年度末までには4500人に増加させることを掲げた。

本学では今後、外国人教員の増員や日本人学生の語学力向上、宿舎などでの留学生と日本人学生の共生、留学生への日本語・日本文化教育の拡充など、多言語に対応した教育・学生支援を行う。また、留学生と市民の交流など、学外との連携にも力を入れる。

本学は来年度から、英語による授業のみで学位が取得出来るコースを9コース以上（学群3コース、大学院6コース以上）を開設するなどし、留学生受け入れに向けた体制整備を行っていく予定だ。

（＝4面に筑波時評）

つくば歳時記

7月16日に開かれた、IBOの夏祭り風イベント「つくばナイト」で。あちこちで「よいやっさー」と声が掛かり、言語を越えた参加者の交流が行われた（＝3面に関連記事）。（撮影・森田聡＝社会工学類）

円周率計算

本学が世界記録を更新

本学の高橋大介准教授（CS）らが2兆9769億8037万桁という円周率計算の世界記録を樹立、ギネスブックに登録を申請するなどし、留学生受け入れに向けた体制整備を行っていく予定だ。

（＝4面に筑波時評）

アジアサイエンスキャンプ

ノーベル賞学者を招待

天皇・皇后両陛下の視察も

アジア各国・地域の科学に夢を持つ学生が交流する「アジアサイエンスキャンプ2009」が、ノーベル賞を受賞した科学者らを講師に迎え、平成基礎科学財団などの主催で8月21－28日に、つくば市で開かれた。7日には天皇・皇后両陛下が視察された。

このキャンプは今回で3回目を迎え、日本での開催は初。講師陣としてキャンプの提唱者である小柴昌俊氏や、本学の学長を務めたこともある江崎玲於奈氏など、国内外から9人のノーベル賞受賞者が招かれた。

キャンプの狙いは、アジアでの基礎科学研究を盛り上げること。キャンプの座長を務める小柴氏は「20世紀、基礎科学研究の中心は欧米にあった。21世紀には、アジアが先導できるようにしたい」と語った。

日本以外に、中国、台湾、インドなど、アジア各国・地域から200人以上の参加者が集まった。「日本の基礎科学のやりがいを感じてもらいたい。アジアで基礎科学研究の機運が高まってほしい」とキャンプの狙いを説明。昨年ノーベル物理学賞を受賞した小林誠氏は「第一線の研究に直接触れてもらうことに、意義がある」と述べた。

キャンプは参加者の議論をまとめたポスターセッションを経て、8日に閉会した。

免疫ブレーキ

渋谷教授らが発見

ワクチン増強に応用も

大学は、一部の細菌などに対し、抗体を作りにくくしている「免疫ブレーキ」と言われる人体の仕組みを、本学の渋谷彰教授（基礎医学）と本多伸一郎講師（同）らが発見したと、6月16日に発表した。人為的にこの「ブレーキ」を外す薬を作れば、免疫の働きでワクチン効果の増強などに応用出来る。

細菌などが体内に入ると、抗体が病原体（抗原）を排除しにやってくる。抗体には「IgG抗体」と「IgM抗体」などがあり、主にIgG抗体が病原体を攻撃する。しかし、糖や脂質、核酸の殻で覆われている肺炎球菌や髄膜炎菌などの細菌にはIgG抗体が出来ず、病気の悪化や長期化を招いていた。

渋谷教授らは働きがよく分かっていなかったIgM抗体に着目し、IgM抗体と結びつく受容体を持たないマウス（ノックアウトマウス）を遺伝子操作で作った。そのマウスに多糖類の殻を持つ肺炎球菌を注射すると、IgG抗体が大量に作られ、肺炎球菌（抗原）を攻撃する強い免疫反応が起こった。これらの実験の結果、IgM抗体がその受容体を介してIgG抗体を阻害していることが分かった。将来的には肺炎球菌や髄膜炎菌などに対する効果的な新しいワクチン療法が開発出来る見通しだ。

カーシェアつくば

軽自動車2台で実験

「かしこい」自動車利用を

本学の学生と教職員を対象にしたカーシェアリングシステム「カーシェアつくば」が7月23日から導入され、来年2月28日までその有効性に関する実証実験が行われる。業務はユーピーアール株式会社（本社＝東京・港区）に委託している。

カーシェアシステムの導入は、国立大学では2例目。1台の車を複数で使うことでCO2排出量を削減する。また、本学の学生と教職員の経済負担を軽減し、環境にも配慮することも目的としている。

車は第一体育館前に2台の軽自動車を配置。入会金2100円（学生は無料）を払い、「カーシェアつくば」に入会することで、ユーピーアール社が平砂宿舎近くに配置している2台の軽自動車も利用出来る。利用の際は、携帯電話で簡単に予約が出来る。料金は基本料金などに加え、走行距離1㎞にあたり15円の「距離料金」と15分あたり50－150円の「時間料金」の両方の料金を足す。

「カーシェアつくば」は、「時間」と「距離」の両方で課金する料金体系が採用されているため、「かしこい」自動車利用を考えるきっかけを与える。この実証実験で利用実態や利用者の満足度などの分析を行い、検証した上で本格導入を検討する見通しだ。

紫のラインがカーシェアに使用される車両の目印

ナノテクノロジー研究開発

市内に推進組織を設置

産業技術総合研究所、物質・材料研究機構と本学は、つくば市に世界的なナノテクノロジー研究開発拠点を形成する事で合意。日本経団連の参加を得、その推進組織として「つくばナノテクノロジー拠点運営最高会議」を設置した、と6月17日に発表した。

日本が得意とするナノテクノロジーだが、近年主要国では国家レベルでのナノテクノロジー戦略と中核拠点の構築が進んでおり、日本もこの流れに乗った格好だ。経済産業省と文部科学省は、多くの研究施設と技術が蓄積されたつくばが拠点形成に最適と判断した。

設立された「つくばナノテクノロジー拠点運営最高会議」はその目的を「我が国及び人類社会の繁栄に貢献出来るナノテクノロジー拠点の形成を産業界と共に目指す」としている。拠点施設の詳細設計などは、2010年度から開始する。カーボンナノチューブや微小電気機械など、実現が期待される技術は多い。

紙面から

総合科目アンケート　新たに受講動機を調査　2
反射鏡　草食男子と肉食女子　4
HALの山海教授ら講演　5
ダンスフェス　第2位のNHK賞を受賞　9
和太鼓実習　成果発表会を開催　10
3Eフォーラム　藻類燃料の情報交換行う　11
特集　6,7
進路決定の岐路　後編
流されない！焦らない!! 就職活動
ミニ特集　3
日本代表、初の金メダル
IBO見聞録

筑波おろし

熱い選挙の夏が終わりを告げた。私にとってもこの夏は、初めて政治という舞台に深く入り込むことが出来た。あるNPO法人が主催する議員インターンシップに参加したのだ。学生が一人ひとり、議員のもとで社会や政治の仕組みを実体験しながら学ぶ。最初は夏の思い出作りのため、新しい事に挑戦したいという、軽い感じでつくば市議のもとに通った。政策ミーティングが刺激的だった。つくばの抱えている問題（農作物の品質保持、子育て支援）を自ら調査し、行動に移す。私はつくばの芸術・伝統文化の周知と育成のための制度作成に取り組んだ▼つくばに関して知らない事があまりに多くて驚いた。周りの仲間の発言に感心するばかりで、何も言えない自分が情けなくなる。政治の知識のない私は、常にノートを用意し、分からない言葉や事象を調べた。ノートはすぐに埋まっていき、自分の無知に嫌気が差した▼井の中の蛙、大海を知らず。私はまさにそれだった。最近は自分よりも一生懸命に、何かに取り組んでいる人たちの姿に目が留まる。自分も同じように頑張りたい。まずは一度手を出したことをやりきろうと思う。大学の授業も、サークル活動も、インターンシップも。全てをうまくやることは難しいかもしれないけれど、今のままではいけないと気付いた。

総合科目授業評価アンケート

新たに受講動機を調査

「内容への興味」が大部分
一般教養としての受講を

総合科目編成委員会（委員長＝金井幸雄教授・生物圏）による、平成21年度第1学期の総合科目授業評価アンケートの結果がまとまった。全体の評価は前年度の同学期に比べて上昇した。

アンケート項目は全部で12項目。今学期は開講した55科目すべてで実施され、当日出席者のうち5213人が回答した。

項目の中では、「この授業の内容はよく理解できたに」は74・4％（平成20年度1学期75・6％）、「授業担当者の話し方に熱意が感じられた」は86・7％（同85・5％）が肯定的な回答だった。また、「この授業により、新しい知識や考え方が習得でき、さらに深く勉強したくなった」は80・2％（同79・3％）、「私にとってこの授業は総合的に満足できるものであった」は81・9％（同81・2％）が肯定的な回答だった。

さらに、今回は新しく「この授業を受講することに決めた」一番の理由は何ですか」という設問が追加された。「内容に興味があるから」が全体の68・0％で、「単位がとりやすそうだから」が10・2％、「専門科目の理解に役立ちそうだから」が9・7％と続いた。

科目別では、「臨床感覚器学（医学開設）」、「地域を創るスポーツ・デザインプロデュースⅠ（体専開設）」などが高い評価を受けた。今年度から開設の「現代人のための科学Ⅰ（教養教育推進室開設）」の満足度は85・6％、「みんなで創ろう『つくばアクションプロジェクト』（学生生活支援室開設）」の満足度は89・2％だった。「現代人のための科学」は2学期には地球科学、化学を取り扱う「Ⅱ」が行われ、「みんなで創ろう『つくばアクションプロジェクト』」は同一内容で2・3学期にも開設される予定だ。

授業ごとに指定されている履修登録の上限を超えたために受講制限を行った科目は8科目あった。各学群の履修者比率については、全体の3分の1以上が自分の所属する学群が開設する授業を受けていた。

金井教授は「学生には興味の薄い科目にも目を向け、社会で必要な幅広い教養を身につけてほしいと考えている。そうしたコンセプトで新しく開設した科目は手ごたえを感じたが、まだ受講者数が少ないので、学生への周知の仕方をもう少し工夫したい」と話した。

全国障害者問題研究会

障害者の強い思い語る
「共同と連帯」の実現へ

全国障害者問題研究会（全障研）主催の「第43回全国大会茨城2009」が、8月8、9日に本学で行われた。8日には大学会館講堂でオープニングセレモニーや講演などが、9日は第2・第3エリアで学習講座や分科会が行われた。

本大会は、不利な立場に置かれがちな障害者らの現状について意見を共有するとともに、権利拡大を全国に訴えることが目的だ。

8日の講演ではまず、脳性まひの娘を持つ新井たかねさんが「娘の生きる希望を奪わないで！」をテーマに重度報告を行った。新井さんは、全国各地に広がっている障害者自立支援法訴訟で、原告である娘の育代さんの補佐人をしている。新井さんは、日額報酬単価や応益負担といった同法の問題点を述べた。また「障害者自立支援法の影響を直接受ける育代は、総選挙で投票をすることが出来ないこともどかしさを訴えた。

自らの体験を交えて語る福島教授

次に、元ハンセン病患者の平沢保治さんが「人間らしく生きる―ハンセン病の差別と闘って」と題した重点報告を行った。原爆症訴訟の原告全員の救済が決定したことに触れ「闘うところに必ず勝利あり」と力強く訴えると、会場からは拍手が起こった。

後半は、東京大学先端科学技術研究センターの福島智教授が「コミュニケーションは人権」と題して記念講演を行った。福島教授は9歳で失明し、18歳で失聴した全盲ろう者である。「コミュニケーションは、水や空気と同様に誰ろう者にとっては不可欠なもの。これがなければ自立は不可能」と訴えた。

熊本県から参加した女性は「ハンセン病についての間違った差別や対応を信じることの怖さを感じている。元患者が社会で健常者と同じように生きていくことを目指すべきだ」と語った。

鈴木宏哉大会準備委員長は「全障研の課題である『共同と連帯』の実現に向けて、皆の願いをさらに広げていきたい」と述べた。

高等教育の国際シンポジウム

教員育成プログラム話し合う
本学と北海道大で開催

実践型のワークショップが開かれた

本学と北海道大学の共催による国際シンポジウム「高等教育におけるプロフェッショナル・ディベロップメント（PD）」が7月に開かれた。27、28日はつくば国際会議場（つくば市竹園）で、30、31日は北海道大学（札幌市北区）で行われた。

日本ではファカルティ・ディベロップメント（FD）が大学設置基準の改正により義務化され、この1・2年はどの大学でもFDが推進されるようになった。本学と北海道大学は10年前から取り入れている。本学ではFDによって授業方法の改善や成績評価の厳格化、教員・職員の能力向上を目指している。

今回のシンポジウムでは教育の質を高めるためのティーチングアシスタント（TA）の起用や、大学院生を有能な大学教員に育成するプログラムなどについて取り上げられた。

27日は第1部がカリフォルニア大学バークレー校の大学院生指導員で、ティーチング・リソースセンター長のリンダ・フォンヘーネ氏と、同校大学院アカデミックサービス部長のサブリナ・ソラッコ氏によるバークレー校における先進的なPFF（Preparing Future Faculty）プログラムについて概要紹介があった。PFFプログラムは、大学院生が大学院課程で学び、大学教授や研究者としてアカデミックライフで優秀な成果を挙げることを狙いとしている。

第2部では両氏による2つのワークショップが開かれ、参加者がTAを利用した成績評価基準の作り方と使い方や、研究成果を発信するためのアカデミックライティングを実践した。

28日はアメリカ、韓国、日本から5人の講師が講演し、その後パネルディスカッションが行われた。北海道大学では2日間にわたって4つのセッションが用意され、カナダやアメリカ、中国、韓国の事例を取り上げたり、PDの手法について各国からの講師が講演した。4日間の日程を通して250人が参加した。

乾燥に強いユーカリ開発

海外での支援を発表

本学は6月15日、アフリカ開発銀行（AFDB、本部・チュニジア）を通じて、乾燥に耐性のあるユーカリの植栽を支援すると発表した。ユーカリは、乾燥等で樹木が育ちにくいアフリカ・サハラ砂漠周辺地域の植林プロジェクトで試用される予定だ。

6月13日にイタリアで開催された主要国（G8）財務大臣会合において、与謝野馨財務大臣は「筑波大学が持つ耐乾性に優れたユーカリの栽培に関する研究成果をもとに、アフリカ開発銀行を通じた支援を行う」と発言。それを受ける形で、本学の渡邊和男教授（生命産業）を中心に、今回の植林プロジェクトなどへの協力を進めることになった。

AFDBとは、昨年5月に「筑波大学とアフリカ開発銀行との覚書」を締結している。それ以来、AFDBやアフリカ諸国を対象に、高等教育・科学技術分野での人材育成や共同研究への協力に取り組んでいる。ドナルド・カベルカ総裁は2度本学を訪れており、AFDBとは友好な関係が築かれている。

今後本学は遺伝子実験センターを中心に、AFDBを専門家の立場から支援して行く。そのためにAFDBと本学との間で専門家を相互に訪問させるなど、協調体制の確立を進めていく。具体的には、植栽に適した土壌や植木の選定のための予備調査や、試験的な植林プロジェクトの実施可能性の調査などを行う予定だ。

つくちゅう・シネマワークショップ

中学生が本格映画作り
プロの映画監督が指導

「つくちゅう・シネマワークショップ」が6月21日―8月30日にかけて本学春日キャンパスで行われた。平成19年度の大学の社会貢献事業として始まったイベントで、今回で3回目の開催となる。

「つくちゅう・シネマワークショップ」は、つくば市在住・在学の中学生が中心となって映画を製作するというものだ。参加する中学生たちは、脚本から撮影、編集に至るまでの製作の過程を、プロの映画監督のアドバイスや本学の学生の手助けを受けながら進めていく。

本学の西岡貞一教授（図情メ）がワークショップを担当し、「白い犬とワルツ」（2002）で監督デビューを果たした月野木隆監督が現場で指導をする。

映画のストーリーは参加した中学生の案から作成され、俳優は参加者の立候補によって決定された。撮影時には、参加者は月野木監督からの指示を受けながら、カメラマンや音声などの役割をローテーションで担当した。

映画のタイトルは「位置について　ドン！」。陸上部でいじめに遭うものの、友人たちに励まされていじめに立ち向かおうとする、主人公の心の成長を描いた作品だ。

8月13日には試写会が行われ、参加した中学生や製作に携わったスタッフ全員で作品を鑑賞し、一人ずつ感想を述べた。ワークショップに参加していた中学生の菊地夏音さんは、「現場で監督に教えられながら撮影して楽しかった。作品を自分たちで見て、達成感を感じたと笑顔で語った。

現場で指揮を執った月野木隆監督は、「映画を製作するという機会はなかなかないので、参加者にはこの体験を通して『何を感じたか』ということを大切にしてほしい」と話した。

指導を受けながら撮影する中学生

新型インフルエンザ

本学生の感染も
秋の流行に警戒

国内の新型インフルエンザの患者数が、8月21日時点で7750人に達しており、厚生労働省は警戒を呼び掛けている。本学でも学生への感染が報告されており、秋以降の流行に備え、個人レベルでも対策を講じる必要がある。

なお、大学は帰省先やレジャー先からつくばに戻った学生に対し、健康管理の注意喚起や感染が確認された学生への対応などを本学ホームページに掲載している。

田中　正美氏（たなか・まさよし＝本学名誉教授）7月13日に老衰で死去、90歳。1946年東京文理科大卒。同年同大副手。49年東京教育大副手。53年同大助手。64年同大助教授。75年本学教授。80年同大学校教育部長。82年退職。91年同大名誉教授。

日本代表、史上初の金メダル獲得

国際生物学オリンピック見聞録

日本初の開催となった第20回国際生物学オリンピック（ＩＢＯ）２００９が、7月12－19日にかけて、本学構内などで行われた。世界56の国と地域から集まった学生達の、８日間に渡る熱い戦いと交流の軌跡、大会を支えた本学生の活躍を追いかけた。（本紙・雪丸千彩子＝人文学類、高橋俊樹＝社会学類、加藤茂行＝地球学類、鳥本剛司、森田聡＝社会工学類）

開会式であいさつをされる秋篠宮殿下

日本代表の声

閉会式の後、日本代表選手の記者会見が行われた。金メダルを獲得した大月さん、銀メダルを獲得した中山さん、谷中さん、山川さんが記者の質問に答えた。（以下敬称略）

◇　◇　◇

――大会に参加した感想を。

大月「各国の選手と交流出来たし、問題も解けた。参加出来て良かった」

中山「問題がとても面白く、全体を通して楽しかった」

谷中「レベルの高い大会だと思った。各国の選手と話も出来、日本の良さを伝えることが出来たと思う」

山川「貴重な経験が出来て良かった。質の高い問題を解けて良かった」

――（大月さんに）全参加者２２１人中６位に入った感想を。

大月「先生方への感謝の気持ちでいっぱい。先生方の協力なくしてこの結果はなかったと思う」

――各国の選手と、どんなことを話したか。

大月「生物学の話は、単語が難しく、しようとしても続かなかったが、いろいろな会話が出来た」

谷中「アニメやマンガについて広く話した。宗教についても突っ込んで聞かれたので、知っていることを正直に伝えるよう心掛けた」

――大会で学んだこと、自信になったことがあれば。

大月「意思を伝えようとすれば会話も出来、友達にもなれることが分かった」

中山「各国の選手はものすごく生物の知識があるな、と思った」

谷中「意思は通じるが、もっと単語力があればより楽しく話せただろうと思った」

山川「いろんな先生にお世話になる中で、自分の知らないことを知った」

――将来について。

大月「昔から生物系の学者になりたいと思っていた。良い成績がとれ、各国の選手とも仲良くなれたので、これからもこの道を進んでいきたい」

中山「自分は生物が好きでここまでやってこれたのだと思うので、これからも生物系の研究者を目指して頑張っていきたい」

谷中「サンゴや藻類への興味で生物学に入ったが、これらはこれからの地球にも必要だと思うし、生物学には一生をかけるだけの価値があるな、と思った」

山川「医学の道に進みたいと思っているが、今夏は物理チャレンジや全国化学グランプリにも挑戦するし、広く勉強していきたい」

◇　◇　◇

今回の大会を経て、それぞれの進む道への気持ちを強くした彼らの、今後に期待したい。

左から中山さん、谷中さん、大月さん、山川さん

開会式

開会式は7月13日、つくば国際会議場（つくば市竹園）で行われた。日本からは大月亮太さん（千葉・県立船橋高3年）、中山敦仁さん（大阪・灘高2年）、谷中綾子さん（東京・桜蔭高2年）、山川眞以さん（東京・同3年）が出場した。

式典は井村裕夫ＩＢＯ２００９組織委員会委員長の開会宣言で始まり、プーンピポップ・カセムサップＩＢＯ会長や山田信博学長らがあいさつを行った。選手宣誓は大月さんと山川さんが行い、シンガポールの審判による宣誓もあった。

開会式の後はウェルカム・パーティが行われ、選手は互いに交流を深めた。

式典には秋篠宮殿下、同妃殿下も参加され、秋篠宮殿下は開会式であいさつをされた。

ＩＢＯ２００９

7月12日（日）	選手団到着 オリエンテーション
7月13日（月）	開会式 ウェルカムパーティ
7月14日（火）	実験試験（筑波大学） 折り紙ナイト
7月15日（水）	エクスカーション 〈サイエンスツアー〉 茨城県自然博物館 サイエンス・スクエア 地質標本館 筑波宇宙センター
7月16日（木）	理論試験（筑波大学） つくばナイト
7月17日（金）	エクスカーション 〈栃木県日光市へ〉 戦場ヶ原 東照宮　など
7月18日（土）	エクスカーション 〈サイエンスツアー〉 つくばエキスポセンター －－－－－－－－－－ 講演会 表彰式・閉会式 フェアウェルパーティ
7月19日（日）	選手団出発

学生ボランティア

熱意で意思疎通図る

今大会の成功の陰には、ボランティアとして参加した本学生たちのひたむきな努力があった。

大会のボランティアスタッフとして約１００人もの学生が大会3カ月前から準備を進めてきた。本紙6月号では、学生たちの活動に焦点を当て掲載した。今回は実際に彼らがどう大会を支えたのか紹介する。

「選手たちに最高のもてなしをするために苦労は惜しまなかった」と、総勢１００人を超えるスタッフのまとめ役として活躍した、チームガイドリーダー塩谷天さん（生物4年）は語る。

お互いの言葉が分からない状況では、どうしても意思疎通がうまくいかなかったり、慣れない英語で口調が荒くなることや、細かな指示が出来ないこともあったという。それでも、今大会の学生ボランティアの評価が高かったのには、やはり学生たちのさりげない親切さや、不慣れな英語でも一生懸命説明しようとする熱意があったからだろう。

塩谷さんは「世界の高校生たちに喜んでもらえ非常に良かった。僕たちも彼らと共にまた学びたい」と意欲に満ちていた。

生物学類長の佐藤忍教授（生命共存）は「本学の教育の素晴らしさを世界的にアピール出来た。これを機に生物学といえば筑波大と言われるように、優秀な学生を世に送り出したい」と目を輝かせた。

学生たちの活躍によって本学がより良い環境になっていく。私たちも、彼らの頑張りに負けずに取り組みたい。

実験試験に取り組む出場者

閉会式

金1個、銀3個を獲得

日本初の開催となったＩＢＯ。18日に閉会式が開かれた。表彰式では試験参加者２２１人中、成績上位者6割にメダルが授与された。内訳は金が23人（全体の1割）、銀が46人（同2割）、銅が68人（同3割）にそれぞれ授与された。

日本代表は金メダル1個と銀メダル3個と3年連続で全員がメダルを獲得し、過去最高の成績だった。大月さんが日本選手では初めて金メダルを獲得し、中山さん、谷中さん、山川さんも銀メダルを獲得した。

また全体では、シンガポールのヤンジー・ドンさんが1位、2位にアメリカ、3位にシンガポールの選手が続いた。総合6位で金メダルを獲得した大月さんは、「とにかくいろいろな先生への感謝の気持ちでいっぱい。名前を呼ばれた時は、本当にびっくりした」と時折目に涙を浮かべながら語った。

最後に井村裕夫ＩＢＯ２００９組織委員長から次の開催国である韓国にトロフィーが手渡された。大会を総括してプーンピポップ・カセムサップＩＢＯ会長は「たった数日間ではあったが、本当に忘れることの出来ないオリンピックになった。皆多くの思い出を共有出来たのではないか」と語った。

■お詫び

本紙２７８号２面掲載のＩＢＯの記事において、問題の答えは次号掲載としていましたが、問題自体に誤りがあり、答えがありませんでした。心よりお詫び申し上げます。

つくばナイト

祭りで一体となった夜

世界56の国と地域からつくばに集結したＩＢＯ選手団に、日本の夏祭りを体感してもらおうと、7月16日、「つくばナイト」が本学第2エリア食堂付近で開催された。交流会では、和太鼓の演奏やよさこいソーランの実演、祭りの出店をイメージした料理が振る舞われた。また、全国高校レシピコンテスト入賞作品も披露された。

オープニングのあいさつでは、ＩＢＯ食育大使の服部幸應氏が「箸使えますか」と学生に問い掛けると、多くの学生が手を挙げ、服部氏から「ＯＫ。素晴らしい」との声が上がった。日本選手団が浴衣とはっぴ姿で登場すると、海外の選手が記念撮影を求める光景が見られた。

選手団に振る舞われた料理は、焼きそばなどの祭りのおなじみメニューから、肉じゃがといった庶民の味まで多岐に渡った。料理には茨城県産の食材や本学農林技術センターで収穫された野菜が使用された。初めてかき氷を食べたという、スイス代表の男子選手は「雪を食べてるみたい。メロン味がおいしい」と話した。

交流会には、市内に住む小中学生がゲストとして参加。食堂では、小学生がナイジェリアの選手に折り紙を教え、交流を深めていた。

空が夕日に染まる頃、ステージでは本学和太鼓サークル「ときめき太鼓塾」の演奏が始まった。一面に響き渡る和太鼓と、力強く太鼓を叩く奏者の迫力に、海外の選手らは圧倒された。続いて本学のよさこいソーランサークル「斬桐舞（きりきりまい）」がソーラン節3曲を披露した。

会場が盛り上がってきたところで、斬桐舞によるソーラン節のレクチャーが行われた。会場が一体となって南中ソーランを踊り、辺りは熱気と興奮の渦に呑まれた。スペイン代表の女子選手は「とっても楽しい。ソーラン節にはフラメンコとは違う情熱がある」と語った。

「ユニバーサルソーラン」の興奮が覚めやらぬ中、選手らは斬桐舞と記念撮影を行った。あちこちで「よいやっさー」のかけ声の後にフラッシュが光った。司会の同時通訳を行った、斬桐舞の北村百代さん（教育2年）は「国際的な会場は初めて。意味合いと気持ちを伝えられればと思って、頑張った」と話した。

つくばでの熱い一夜は、祭りの終演を惜しむ声と共に幕を閉じた。世界が日本の文化に触れ、一体となった夜のことを、選手は忘れないだろう。

反射鏡

草食男子は僧職男子!?

鎌皿伊予（PN）（人文3年）

草食男子は恋愛にそれほど利益があるとは思わない。拘束される、金もかかる、子供も欲しくない。ならば、なぜ恋愛しなければいけないのか。恋愛こそ無意味だ。草食男子は悟りを開いている。彼らは「僧職男子」とも呼べる。

「草食男子を狙え」という記事が肉食女子向けの雑誌に載ることがある。これは草食男子がおとなしいからである。女性が主導権を握りやすいのだ。運よくおとなしい男性を捕まえれば財布も握れるし、わがままを聞いてもらえる。そのうえ恋愛しているという満足感も得られる。

イケメンな草食男子を狙いたいところだが、それは難しい。彼らはモテないからあきらめたとかではなく、モテた末に恋愛に絶望し、純粋な悟りを得た可能性が高い。通常のイケメン同様、いやそれ以上に落とすのは難しい。だが、モテないが故に草食男子になった男性ならば、恋愛経験が少ないため、いくらかの希望を残しており、肉食女子の積極的なアピールで落とすことが比較的容易だろう。思うに、「草食男子を狙え」という記事は、女性の側から分相応の男とくっついて、消費行動の要因である恋愛が広がることを期待するものではないか。

「狙え」と言われて狙うような恋愛は相手に恋していると言うよりも、「恋に恋している」と言った方が正しいだろう（金や地位に恋している場合もある）。恋愛している自分や、恋愛で得られる満足感が好きなのであって、相手は誰でも良いのだ。好きだから付き合うのではなく、「恋愛したいから好きと言っておく」なんて本末転倒である。こういう要素も含めて恋愛至上主義が成り立っていることを忘れてはならない。ドラマ、歌、さまざまな所に流布されている恋愛至上主義の実態は決してきれいなものではない。草食男子が幻滅するのもうなずける。

恋愛至上主義に立ち、結婚を目標とする価値観を持った人から見れば、草食男子はゴールを目指さずに道草を食っているだけに見えるだろう。だが、美味しいと思えない肉を求めて無理に狩りをして怪我を負うよりも、美味しい草を食べていた方がいいと感じるのはおかしなことだろうか。

恋愛よりも大切なこと

白戸顕二（国総2年）

今回、「草食系男子、肉食系女子」というテーマで寄稿させて頂くことが決まって、いろいろと考えてみました。しかし、最終的どうでもいいという結論に至りました。すみません。

要は、恋に積極的なら「肉食系」。消極的なら「草食系」。そして「草食系男子」は人気があるとかないとか。そんな彼らを「肉食系女子」がハントしているとかいないとか。という流行語のようです。

自分には恋愛経験がないので「草食」でしょうか。きっとそうなんでしょうね。どうせなら、アメリカバイソンとか、トムソンガゼルがいいなあ。（ちなみに、アメリカバイソンとは、北米に生息する高さ1.5―2メートルのウシ科の動物、トムソンガゼルはアフリカからモンゴルにかけて生息する、時速60キロで走れるウシ科の動物です。参考HP：ナショナルジオグラフィック公式日本語サイト http://www.nationalgeographic.co.jp/）

この言葉、去年あたりから話題になりましたね。ネットでちらほら取り上げられているようです。関連書籍も多数出ました。

それにしても、世界的金融危機が日本にも波及し、日々の生活や就活に悩む筑波大生が多い中で、「草食系男子、肉食系女子」について筑波大学新聞紙上で語る自分って一体……と感じます。紙面が余っているようなので、最後に、昨年、山形の免許合宿所のバス運転手の人がさりげなく語って下さった言葉をご紹介します。「（ホタルで有名な川のそばで）男はな、ホタルみたいに、一生懸命光らなきゃだめだ。何度も、何度もな」。

次号のテーマは

今後の政治への期待です

連絡先　TEL 029・853・6699　e-mail shinbun@sakura.cc.tsukuba.ac.jp

筑波時評

グローバル30

留学生・外国人教員増やし国際競争力のある大学へ

橘田 正造

2009年7月初旬筑波大学が、文部科学省の「国際化拠点整備事業」別名「グローバル30」（以下、「G30」）の初年度の拠点校13大学の一つに採択された。内訳は、国立7大学と私立6大学で、国立では応募申請をした15大学から本学を含む7大学が採択された。

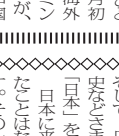
ではG30とは何か。日本を取り巻く国際環境と本学が目指すG30の中身について紹介する。

9・11の後しばらく留学生を含む入国者管理を厳しく規制していた米国が、科学技術レベルの維持向上のため、また優秀な人材獲得の観点から数年前に、留学生等を対象に入国管理規制の緩和を行った。これに追随する形で英国、フランス、ドイツの欧州主要各国も優秀な留学生を含む人材獲得競争に乗り出した。グローバル化が進む中で、このように自国の「国際競争力」の維持向上を図るため、先進各国は大学を巻き込んで激しい人材獲得競争を行っている。翻って我が国は少子高齢化が叫ばれて久しいが、企業レベルはともかく、大学レベルでの国際化は欧米に比較すると未だ出遅れていると言わざるを得ない。

しかし一方で、優秀な留学生や外国人教員を日本の大学に誘引するには、日本の大学自体の研究・教育レベルが欧米と比べて勝るとも劣らないものでなければならない。また、宿舎や奨学金等を含む生活環境の充実も極めて重要である。そして優秀な留学生や外国人教員誘引するためにも、授業自体が英語で行われる環境、更には英語の授業のみで学位が取得出来、卒業出来るシステム整備も必須である。G30とは、まさに我が国の大学の研究・教育環境の高度化を促し、国際競争力のある大学の環境整備を推進する一環として実施されるものと言える。

では筑波大学がこのG30の下で目指す国際化とは何かというと、山田学長が日頃から言われている「国際性の日常化」や「世界との共生の場」の具現化である。実は、筑波大学は、その建学の理念において「開かれた大学」を唱え、国内外の教育・研究機関との交流を深めつつ人材の育成に努めてきた。今後も、筑波大学としては、21世紀における教育・研究の世界的拠点を目指すと共に、①高い研究レベルに裏打ちされた「知の蓄積」と、②国際的リーダーとなる人材の育成・排出、更には③地球規模課題に対する解決策の提示、をミッションとしてその実現に努める考えである。その意味で、今回のG30は、まさにその本学の努力を後押しし、目指す自標の実現を支援する手段とも言える。

G30の下で本学が目指す具体的目標を数値でいうと、2009年5月現在1522人の留学生（国立大学では第3位の規模）を、2020年度において4500人に、外国人教員を129人（兼任を含む）から160人（同）にして、学生の4人に1人が外国人、教員の10人に1人が外国人である環境を目指すもの。また2008年度には221人であった海外への留学生派遣を2020年度に1000人に増やす計画である。



そして英語で学位が取れるコースは、2009年5月現在10コース（本年度開設の3コースを含む）あるが、今後5年以内に少なくとも9コース以上開設するという、大変チャレンジングな内容の計画である。尚、本学が有する2つの海外拠点（チュニジアとウズベキスタン）のうち、チュニジアの「北アフリカ・地中海連携センター」は、この度「海外大学共同利用事務所」として採択され、今後は筑波大学のみの拠点ではなく、我が国の大学のアフリカ地域における共同利用事務所としての機能も加わることとなった。本年8月初旬には第3番目の海外拠点としてホーチミンに事務所を開設したが、2009年度中には中国とドイツでも新たな海外拠点を開設予定で、より一層学生交流と学術交流を推進する環境を整備する計画である。

学生の皆さんのG30へのご理解と積極的なご協力をお願いしたい。（教授・国際部長）

留学生の目

バヤエバ・ラチン・バヤエブナ

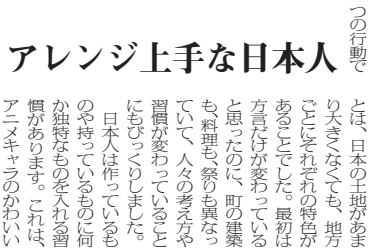
私はトルクメニスタンから来た留学生のラチンです。去年の4月に来日しました。しかし、その時、日本語を全然分からなかったので、最初の1年間は日本語弱けを勉強しました。その1年間で、日本語だけを学んで、そして、日本事情や日本史などさまざまな分野「日本」を学びました。

日本に来て印象に残ったことはたくさんありますが。その一つは、かわいい物がいっぱいあることです。日本で初めて買い物に行った日は、「かわいい物がこんなにも多いんだ」と思ってびっくりしました。どの店に行ってもかわいくて、買いたいと思ってしまう物があって、その日は「これを何に使うのでしょう」と思うようなものまで買って帰りました。これは日本の市場の一つの特徴だと思う。日本の女子がだいたいみんなかわいい物が好きで、物の使い道や必要性だけではなく、外見も大事になっています。これを知っている市場がそのための新しいマーケティングシステムを作っているのは不思議で、素晴らしいと思いました。

先に話したのは、来た直後の印象でしたが、日本の生活になれることによって、カルチャーショックも少し受けて、今となっては、とても素敵だと思う二面を見つけました。日本の食文化のことです。和食を食べ始めた時から日本料理がおいしいと思いました。さらに体にも良い。母国の特に私の家族で、食事は栄養を取るものでした。ある意味、生きるために必要である一つの行動でした。また、食事に関する特別の習慣などはあまりありませんでしたが、日本では食事がとても大切で、家族とのコミュニケーションを取る時間であって、話し合いの時間でもあります。そして何より、食べているものにこだわるところもありますが。季節と同時に、料理の色合いや形も変わって、地方によって食物や料理の味の濃さまで変わります。これによって、さまざまな味を楽しむことが出来るのがとても素敵だと思いました。

それで、私が驚いたことは、日本の土地があまりと大きくなっても、地方ごとにそれぞれの特色があることでした。最初は方言だけが変わっていると思ったのに、町の建築も料理も、祭りも異なっていて、人々の考え方や習慣が変わっていることにもびっくりしました。

日本人は作っているものや持っているものに何か独特なものを入れる習慣があります。これは、アニメキャラのかわいいパソコンであったり、独特な料理であったりします。私は、これが日本人の特徴であって、海外ではそれほど見慣れない風景でもあると思います。これは、日本が外国人に与えている良い印象だと思います。（社学1年・トルクメニスタン）



アレンジ上手な日本人

投稿

プール使用日検討を望む

中川敬史（数物1年）

大学の屋内プールの一般開放に関して意見があります。現在、筑波大学の屋内プールは、週に一度、水曜日の17時から18時30分に開放されています。これは筑波大学の学生でありながら、普段プールを使う機会のない学生にとっては、非常に貴重な時間です。しかし、過去には、この一般開放が週に一度ではなく週に3度あったと聞いています。正直なところ、週に1度だけの一般開放では、足りず苦しく感じています。というのも、現在私は大学院の授業に水泳を履修しているのですが、一緒に履修している学生の中には、一般開放を利用している学生が大勢います。彼らも同じように週に1回では少ないと言っています。全く泳げない初心者の学生達にとって、水に触れる機会が少ないというのは致命的です。

せっかく授業で泳ぎ方を習ってもそれを復習することができません。これではあまりにも残念です。昔のように3度あったとすれば、このような不満もなくなると確信します。また、最近では、大学生の運動不足の問題がよく取り上げられています。このような問題に対応するためにも、プールの一般開放は非常に有効な手段だと信じます。現在の考えとしては、火曜17時から18時30分と木曜17時から18時30分を付け加えてほしいです。

ロボットフォーラム2009

HALの山海教授ら講演

ロボット産業の発展へ

「ロボットフォーラム2009」が7月9日につくば国際会議場（つくば市竹園）で行われた。主催は茨城県圏央道沿線地域産業・交流活性化協議会（会長・市原健一つくば市長）と日本経済新聞社。

本学の油田信一教授（知機）と山海嘉之教授（同）が基調講演を行った。

油田教授は「茨城県のロボット技術と産業の活性化」と題し講演。「圏央道沿線には大学、メーカーなどの研究機関が多く、ロボット技術に必要な要素がそろっている」と述べ、圏央道沿線地域が持つ可能性を示した。

また、「技術の細分化、空洞化が進む現在、全体を見通す力を持った技術者が必要。ロボット技術の開発は人材育成にも適している」とし、教育者の立場からの期待も語った。

山海教授は、「福祉用ロボットスーツの事業化の取り組み」をテーマに講演。ロボットスーツが高齢者や障害者の歩行などを補助している映像が紹介され、会場の興味を引いていた。

ロボットスーツHALは21世紀発明賞を受賞するなど世界的に高く評価されている。すでにレンタル事業が始まっており、医療や福祉の分野での普及を目指す。今後は長時間の動作が出来るものや、子供用の開発を進めたいという。

ロボット産業の発展に対しては、「技術の融合とビジネスモデルが統合された視野が必要」と述べ、「新技術に行政が素早く対応出来なければならない」と、さまざまな分野の協力が必要なことを訴えた。

講演中には、実際にロボットスーツHALを装着したスタッフが壇上でパフォーマンスをするなど、高い機能性をアピールした。

同フォーラムではほかにも企業などによるプレゼンテーションや座談会、交流会が行われた。今後の圏央道沿線地域でのロボット産業の発展が期待される。

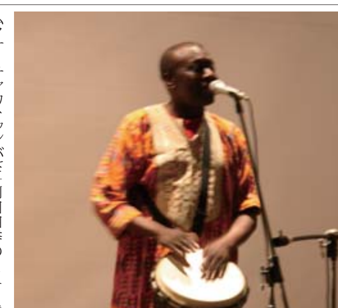
チャリティコンサート

アフリカンドラム奏者演奏

収益金はウガンダに

チャリティコンサート「生活にチャリティを」が、7月5日、イーアスホール（つくば市研究学園）で行われた。NGO団体「ユース・エンディング・ハンガー茨城」が主催し、学生、一般客ら47人が訪れた。今回のコンサートの収益金は、アフリカ・ウガンダでの「養豚プロジェクト」に利用される。

今年で10回目を迎える本コンサートは、コンゴ出身のアフリカンドラム奏者、ムクナ・チャカトゥンバさんの演奏で始まった。チャカトゥンバさんは、劇団四季のミュージカル「ライオンキング」で初代パーカショニストを務めた経験を持つ。曲の合間には、「元気ですか」は「サンゴニーニー（3522）」、「元気ですよ」は「サンゴテ（35手）」と、スワヒリ語でのあいさつを日本語の数字の読みと自身の手を使い紹介。会場の笑いを誘った。



アフリカンドラムを演奏するチャカトゥンバさん

続いて、中南米の民族音楽を演奏する「筑波大学フォルクローレ愛好会」が「コンドルは飛んでいく」など4曲を披露。最後に、市内で活動を行っている「つくばクラシックギター愛好会」の与那嶺新（よなみねしん）さんによるギター演奏でコンサートは幕を閉じた。

コンサート終了後には、飢餓・貧困問題について体験的に考える「エンディング・ハンガーゲーム」を参加者全員が行った。

物理チャレンジ

茨城県勢が健闘

2人が金賞受賞

高校生以下を対象とし、物理学の知識を競う「第5回全国物理コンテスト・物理チャレンジ」が先月2－5日の4日間、本学などで行われた。この大会は、来年7月に開催される国際物理オリンピッククロアチア大会の日本代表選手選考も兼ねている。

3日には理論試験、4日には実技試験が行われ、中学・高校生約100人が挑戦した。

5日には表彰式が行われ、理論試験と実験試験の総合成績順に、上位には金賞（6人）、銀賞（12人）、銅賞（12人）が贈られた。

県内からは高校生4人が参加し、深井洋佑さん（土浦一高3年）が総合成績1位で金賞と県知事賞を受賞、今年7月の国際物理オリンピックメキシコ大会で金メダルを獲得した東川翔さん（水戸一高3年）も金賞を受賞した。

今回の参加者のうち、高校2年生以下の参加者の中から5人が日本代表に選ばれ、来年のクロアチア大会に派遣される。

筑波大学を描こう

指導受け子供たちが写生

作品の展示、表彰式も

つくば市に住む子供たちが本学の風景を描く「筑波大学を描こう　夏休み子どもアート・デイキャンプ」が7月24－27日にかけて、筑波キャンパスで行われた。

構内で絵を描く子どもと母親

このイベントは、文化庁の「文化芸術による想像の街」支援事業。子供たちは本学の芸術系教員や学生からアドバイスを受けながら、絵を描く体験をした。景色を描く子供たちの中には、本学の自然を描く子供や、建物を描く子供などが見られた。本学総合研究棟D棟周辺の芝生や池のほとりは多くの小中学生で賑わっていた。

子供たちが描いた作品は、8月17－21日に本学の総合交流会館マルチメディアルームで展示され、17日には「筑波大学を描こう」絵画コンクール授賞式が行われた。

応募総数は103点。小学生低学年の部、高学年の部、中学生の部、高校生の部の4部門で、最優秀賞と優秀賞が1人ずつ、佳作が数人選ばれた。

本学南地区の天久保池のほとりを描き、小学校高学年の部で最優秀賞に輝いた冨沢咲絵さん（竹園東小6年）は、「日によって天候が変わったことで、光の当たり方など満足出来ない部分もあったのに」と思わぬ受賞に驚いた様子だった。

審査委員長を務めた山本文彦名誉教授は、「絵を描く事が好きであることは才能だ。次回も参加してほしい」と子供たちに語った。

原点 GEN-TEN

父がくれた紙工作とパソコン

折紙作成プログラムの開発に

三谷 純

昨年末に、ちょっとしたひらめきがあり、回転スイープ形状を内包する立体的な折紙の設計技法をプログラムに実装しました。試してみると、今までに見たことが無い興味深い形を1枚の紙から作り出せることが分かり、夢中になってさまざまな形を折っては写真をWebに公開しました。この折紙作品について新聞やテレビなどのメディアで紹介していただくなど、予想以上の評価をいただきました（本紙第278号でも作品の写真を掲載していただきました）。今秋には展開図を収録した書籍が出版される予定となっています。

さて、私がこのような折紙の研究を始めたのは「紙で形を作る」ということに強い関心を持っていたからに他なりません。今から3年前に折紙の研究を始める以前は、紙を切り貼りして形を作るペーパークラフトの研究を行っていました。それ以前は3DCGにおける形状設計に関する研究を行っていたのですが、ディスプレイに表示される仮想的な形に飽き足らず、実際に手にとって触れられるものを作りたいと思ったのがきっかけです。このように研究の動機は極めて単純なもので、その実現も容易に思えましたが、いろいろ調べると、伸縮を許さない1枚の紙から意図した形を作るということは、数学的にも工学的にも大変興味深い問題であることが明らかになってきました。「折紙」「ペーパークラフト」というキーワードを並べると、そんなものが研究になるのか、と思えるかもしれませんが、これらに飽くことなく10年間近く取り組んでこれたのは、私が子供のころの父の影響だと思います。小学生の時に父が与えてくれた紙工作の本に熱中し、載っていた展開図を工作用紙に写し取っては、日々工作ばかりしていました。また、やはり小学生の時に父が与えてくれたパソコンでのプログラミングにも熱中しました。これら2つのものが、大学院に進むころに結びつき、今の研究内容を決定したのだと思います。

今や私も2児の子を持つ父親となりましたが、自分が子供のころに影響を受けたものを、未だに熱中していることを、我ながら不思議に思います。また、それと同時に、このように自分の好きなことに取り組むことが許される大学の環境に感謝しています。

小学生の時に、父が与えてくれた紙工作の本とパソコン、それが私の研究の原点と言えます。

みたに・じゅん

1975年生まれ。システム情報工学研究科コンピュータサイエンス専攻准教授。東京大学大学院精密機械工学専攻修了。理化学研究所基礎科学特別研究員、筑波大学システム情報工学研究科講師を経て、現職。専門はコンピュータグラフィックス、形状モデリング。

私の一冊

異文化の本質を知る

家畜の歴史

F.E.ゾイナー著 国分 直一／木村 伸義訳

田島 淳史

学生時代は、さまざまな経験と学習、そして偶然の出会いが混合して複雑に化学反応を起こし、心の中に「自分にとっての必然」が芽生えてくる時代ではないかと思います。

私は、北海道の地方都市で生まれ育ちました。当時、私の家の周りの畑は馬で耕され、田植えや稲刈りはまだ全て手作業でした。そして、公立の小中学校でパンとミルクの給食を食べて生活する中で、家畜に興味を持ち畜産学科に進学しました。

大学で学んだ畜産学の中では、家畜の生理や機能に最も興味を覚えましたが、その一方で子供の頃から見慣れた「馬」という動物が人類の歴史の中で果たしてきた特別な役割や、私の時代の学校給食でなぜ米が全く使われなかったのか、その複雑な背景についても学びました。

さらに、家畜の品種改良に果たした人間の役割を知るに及んで、家畜に対する私の素朴な興味は、人類はなんと凄い事を成し遂げたのかという驚きに変わっていきました。

この様に、家畜についてさまざまな側面から学ぶ中で、最も影響を受けた一冊が今回紹介するゾイナーの「家畜の歴史」です。この本に描かれている個々の家畜の生物学的性質や、人間と家畜の関係に関する考察の深さにはただ驚くばかりです。この本を読み進むうちに、日本ではついぞ成立しなかった遊牧・牧畜の文化が、実は世界史の中で極めて重要な役割を果たしてきたことを認識するに至りました。

遊牧・牧畜は水に乏しい西アジアで始められましたが、そこに住む人々が家畜とその生産物に依存する中から生まれた思想が、一神教を主たる教えとした「旧約聖書」に集約されていることを考えると、現代社会においてもその影響力の大きさが覗えると思います。これに対し、稲作に伴って創り上げてられてきた文化・伝統の中から生まれた日本民族の物語が「古事記」と「日本書紀」に集約されており、その特徴が水と太陽に恵まれ四季の明確なこの地で、個性豊かな数多くの神々が織り成す出来事であることはまさに対照的です。

この様に考えると、人間の歴史はある意味で「適地適作」と「適地適畜」の狭間で紡ぎ出された叙事詩とも言え、日本文化を理解するには「稲作」を避けて通れない様に、西欧社会、イスラム社会およびユダヤ社会の本質を理解するには「家畜」に関する基礎知識が不可欠といえます。

今改めて思い返してみると、私がこの様に家畜について考えるきっかけとなったゾイナーの「家畜の歴史」は、「私にとっての必然」が創り上げられていく過程で欠くことのできなかった「私の一冊」です。（法政大学出版局・6090円）

（生物圏・教授）

就職活動 流されない！焦らない!!

就職活動を始める時期は年々早まる。また企業の採用定員数削減のニュースが目につく。「自分は就職出来るのか？」。そう不安を抱く学生も多いだろう。今回は学生の「浮き足だった気持ち」を解消するため、就活を経験した学生、企業人事担当者、専門家、そして教員に話を聞いた。（本紙・西内彩香、野口尚喜、松本典子、光安素子＝人文学類、牛尾仁実＝社会学類、宇治田輝之、隅田聖彦＝国際総合学類）

就活経験者の体験談

企業に熱意を伝える

2人の就活経験者に話を聞いた。Aさんはサッカーチーム運営会社に内定した。Bさんは就職浪人をする予定だ。

◇

——業種・職種決定の決め手は。

A　幼い頃から続けてきたサッカーにかかわることが出来る職業を選んだ。

B　企業が求めるのはその方向性に貢献出来る人材だと考え、自分に向いている職業を選んだ。

——面接での質疑応答は。

A　「会社を選んだ理由」と「会社でしたい仕事」について問われた。それには「会社の理念に共感した。またチームが勝ったとき、自分が味わった感動を皆に伝えたい」と答えた。

——面接で見られた点は。

BA　あいさつや表情、受け答えの印象が見られる。

A　ぎこちない敬語を話すことなく、自然体でいることも大切。

——セールスポイントについて

A　「行動力と責任感」をウリにした。

B　「アシスト力とマーケティング力」を前面に出した。

BA　面接やESでは、具体的なエピソードを交えて説明した。

——自己分析の方法は。

A　主に市販の本を使い各項目に答えながら行った。また自分の考えをノートやインターネットの日記に書き留めた。印象に残っていることは、自分にとって大切だと思い、幼少期から現在に至るまで、覚えている範囲でまとめた。

B　「達成したこと」「苦労したこと」というキーワードからエピソードを書き出した。

——内定がとれた理由は。

A　やりたい仕事と会社が行っている業務がマッチした。また長年チームのファンだった自分の会社への熱意が伝わった。

——内定がとれなかった理由は。

A　他学生と比べると企業分析が十分でなかった。知識が不足していたため、面接官に熱意が低いと評価された可能性もある。

——就職活動を意識し始めた時期は。

B　インターンシップの募集が始まった大学3年の6月から。

——インターンシップについて。

B　自分のスキルがビジネスの場で通用するか試せ、ネタも増える。

A　インターンシップを通して「仕事」を肌で感じることが出来た。後輩にも勧めたい。

——就職浪人について

B　就職浪人中に何をしたか説明出来るようにする必要がある。

就活生たちの激戦の幕は上がった

人事担当者の意見

目の前のことを懸命に

企業はどのように学生を見ているのか。現場で採用試験に携わる住宅メーカーのCさん、コンピューター関係のDさん、マスコミ会社のEさんに話を聞いた。

◇

——企業が求めている人材

E　終身雇用が崩れ、即戦力を求める会社がある一方、10年20年の長いスパンで会社に貢献してくれる人材を求める会社もある。

D　自ら動くことが出来何かをやり遂げることが出来る人が良い。

——1、2年生からやっておくべきこと

C　将来の就職のことばかりを考えるのではなく、今目の前にあることを一生懸命取り組むことが大切。「学生時代にこれをやった」と言えれば評価も上がる。中でも「真剣にやっていたこと」「長く続けたこと」があれば魅力を感じる。

——学部による差

C　採用試験は「人」を見るものだ。学部で決めるならば面接は必要なくなるだろう。

——留学経験やインターンシップへの参加、取得した資格などの影響

C　行動力の評価につながる。経験や資格そのものより、「なぜ取り組んだのか」「どのような努力をしたか」が評価される。

D　入社後にどれほど学ぶ意思があるかの指標にもなる。

——企業研究、業界研究について

D　本当にその会社で良いか十分に考える必要がある。何を大切にする会社か、どんな仕事をすることになるかよく知るべき。

E　全く何も知らない、では話にならない。しかし、詳しいからといって採用するわけではない。特性を調べる傾向が強い。

——採用・不採用の違い

D　採用と不採用の差は紙一重。不採用でも選考結果に明白な理由があるケースは希だ。

——筑波大生の印象

C　文理の偏り無く純粋な「天然水」のようだ。

E　都心の学生と比べまじめに映る。

——早期就職について

DC　企業は学生の囲い込みをしようとしているし、就職実績獲得のために早く動く大学もある。学生は板挟みの状態にある。しかし、多くの企業が経団連の「就活は4年生の4月から」という倫理憲章に賛同している。

人事担当者に聞く面接

◆面接で審査されるポイント

面接の回数は企業によって異なるが、ここに一例をあげる。一次面接では身だしなみや挨拶、声の出し方など基本的なことが見られる。二次試験では学生生活の様子や企業への適性を見る。選考段階では能力よりも、入社後どれほど楽しく活躍してくれそうかも判断材料になる。最終面接ではその人のやる気、熱意を重視する。志望先への「入りたい」という熱意の有無が重要だ。「本当にうちの会社に入りたいかは、顔を見れば分かる」という意見も聞かれる。就活は単なる作業ではないのだ。

◆面接中の態度

私たちが面接で求められていることは「自己アピール」である。自分が学生時代に何を達成したのか、具体的なエピソードを交えて伝える必要がある。しかし、あまりに過剰なアピールであったり、落ち着きなく目が泳いでいたりすると、面接官の心象もよくなくマイナス点をつけられることが多い。

肩に力が入り過ぎている人を見ると「ストレスで辞めるかもしれない」と思われることもある。面接の時点で振る舞いが自然でないと、就職してからも自然に仕事が出来ない可能性があるからだ。自然体で堂々と、まっすぐに面接官の目を見て話さなければならない。

専門家の話

柔軟性に欠けた採用

大手企業から独立し、現在キャリアについて著書も多数執筆している山本直人氏に話を聞いた。

◇今の就職活動全体について

——現在の就職活動の状況をどう見ますか。

一言で言えば非常に柔軟性に欠けていると思います。新卒の就職でその後の人生が決まってしまうような仕組みはおかしい。世界的に見ても、日本のように就活が「受験勉強化」しているのは特異な例です。日本の現状は、就活の理想からは遠いと思います。

山本 直人氏

——理想の就活があるとすれば、どのようなものだと思いますか。

例えば、ヨーロッパなどでは年単位でのインターンシップで採用を決めています。現在の日本でそこまで採用体制を変えることは難しいかもしれませんが、もっと幅広い採用（就活）の形があるべきです。一番してはならないのは、短時間のお見合いのような採用です。ですが残念なことに現在、日本の多くの企業がこの形式をとっています。

——大学として現在の就活にアプローチしていける点はありますか。

大学が一番困っているのは「就活の早期化」による授業欠席者の増加でしょう。であれば、日本の大学全体で声を大にして「今の採用時期は早すぎる！」と、どんどん企業側に訴えるべきです。授業のない土日に説明会を開く決まりを作っても、絶対に抜け駆けは出て来ます。

またゆるやかな就活を促進するという意味では、企業と大学が共同で行う授業や、インターンシップの結果を大学でも評価するといった仕組みの充実が効果的かもしれません。

◇就活を目前に控えた人に向けて

——就職面接の際、企業（採用者）側は何を見ているのですか。

一つはその学生の「いいところ」はどこか、もう一つは「オーラ」ですかね。

面接のときには、採用側もとても緊張しています。採用に失敗は許されないからです。潜在能力はあるものの、面接で発揮出来ない学生は多く、その隠れた「いいところ」を採用者側は見つけたがっています。

「オーラ」というのは自分に対する「自信」でしょうか。根拠の無い自信で構わないので、「私を見てくれ」という堂々とした雰囲気がとても重要です。「コイツ何だか分からないけど、ライバル社に取られたら惜しいな」と思わせればしめたもの。部屋に入った直後に学生から受けた印象が最後まで変わらないことも多いですね。

——採用者側から見た筑波大生のイメージを教えてください。

イメージとしては、「ちゃんと勉強してるんだろう」という感じです。ちょっと神秘的で採用者側も興味を持ちやすいと思います。

また筑波大生は、同じ企業に就職が偏るという傾向が少ないですよね。企業はいろいろな大学から人材を採りたいと考えているのでとてもいいことです。

筑波大生の場合は、採用者側も「勉強」の部分に対する期待が高いので、自分の研究の方法論などを交えて話すと、そこに個性が出て来るかもしれません。

エントリーシート

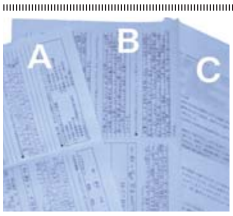
「エントリーシート（ES）とは何か」と疑問を抱く学生は多いだろう。今回取材した3人の人事担当者の意見を通して、ESについて説明する。

ESは履歴書とは異なり、企業が独自に作成、配布するものだ。学生には提出先の企業ならではの内容が期待される。「採用の際、企業が最初に見るものなので、とても大切」と人事担当者の一人は語る。

手書きの場合、「丁寧な字で書き、読みやすくすること」を求める点で各社の人事担当者の意見は一致した。就活生の中には自由欄で文字の大きさや色使いを変える人もいるそうだが、読みにくくなっては本末転倒なので注意が必要だ。

顔写真も重要

貼付ける写真も重要だ。社会人は体力があることが大きなポイントで、写真からその人が健康そうかどうかを見る。「二日酔いや徹夜明けで撮ってはいけない。腕の良い写真屋を利用するなど、お金をかける価値はある」という意見も聞かれた。



評価された模擬エントリーシート

3人の本学生が書いた模擬ES（A—C）を、実際に企業の人事担当者に評価してもらった。

AとBは対照的だ。Bは字が丁寧に書かれており、日付などの記入事項に漏れがない。しかしAはいずれも不十分だ。字が汚く読みづらいと、評価が下がり、読み飛ばされる可能性もある。

内容に関しては、Aは簡潔で、具体的なエピソードが盛り込まれているが、Bは質問に対する答えが観念的で、具体的なエピソードがない。ESの採点はほんの30—60秒で終わる。具体的な人物像を読み取りやすい内容の方が評価に繋がる。

またAは、回答欄に空白があり、採点者の心象が悪くなるという。

Cは自由形式のESの一例だ。内容はA同様、高評価だった。しかし、センテンスを分けておらず、人事担当者は「読む気がしない」と断じた。自由形式の場合、番号をふったり、文頭を一段下げるなどの配慮が必要だ。

結果的に3者のESは、同程度の点数と評価された。

就職？ 院進学？

進路決定の岐路 後編

自己分析の専門家の話

就職活動で避けて通れないのが自己分析。しかし、その意義や方法が分かっていない人も多いのではないか。そこで、道谷里英准教授（キャリア支援室）に自己分析について聞いた。

そもそも自己分析とは何か。我々に思い浮かぶのはテスト形式のものが多いが、「テストはあくまでもきっかけ。そこから何を感じ、考えるかの方が大切」だと道谷准教授は語る。そして、自分を通して自己発見し、自分を表す言葉を探すことこそ、就職活動における自己分析の最大の目的なのだ。

では例えば、テストの結果で向いている職種と、自分のやりたい職種が食い違っていたらどうすれば良いかその時考えるべきは、自分の職種のイメージとその職種の実態に差があるのではないかということだ。もう1度、職種について見つめ直してみるべきだ。

とはいえ、能力や興味・関心、価値観など、テストで測られているものにより出てくる結果は変わってくる。「それで混乱したら就職課が相談に乗る」と道谷准教授はいう。

以上を踏まえ、自己分析ポイントが見つからなかったらどうすれば良いのか。そのときは、「家族や友人に自分の良い点を聞いてみる方法も有効」と道谷准教授は語る。また、「セールスポイントというのは、その人らしさ。誰でも必ず見つかる」と付け加えた。

学生の中には、特別な経験をしていないと就職活動では生き残れないのではと考えている人も多いと思う。しかし、そんな必要は全く無い。企業は、ものの考え方や人とのかかわり方などを見て、どんな人かを知ろうとしているだけなのだ。道谷准教授は、「特別な体験は必要ない。初対面の人にも自分のことを分かってもらえる、具体的なエピソードが大事」と語る。

最後に道谷准教授は、「人生を激励した。

エピソードで自己表現

早期就職 ―教員の思い

早期化する学生の就職活動。最近では学部3年や修士1年の秋頃から、授業を休んで就職説明会に行く学生も多い。この現状を、教員はどう見、またどう対応しているのだろうか。2005、6年度に工学基礎学類とその大学院の就職担当委員をした白瀬勝美教授（電物）に話を聞いた。

―近年の就活を見ていて、以前と変わったところは何ですか。

軸がないという点では、大学選びでも同様の傾向があります。以前は「自分は将来こういうことをやりたい」という思いを持って、進路を決める学生が多かった。ところが最近は「国語が出来なかったから理系に来た」「○○はしたくないから△△にした」というように、消去法で進学した学生が目立ちます。それでも何かしらの目標を学ぶうちに見つければいいのですが、なかなかそうはいかず、就活でつまずくようです。

―就活の早期化による学業への影響は。

たまに「就職面接と授業が重なっているので、欠席扱いを免除してくれませんか」という学生がいます。とてもおかしな話です。私は就活を欠席の理由として認めていません。ですが、授業を1回休んでも行きたい説明会や、どうしても入りたい会社であれば行けばいいと思います。

早すぎる就活に疑問

一昔前と今とでは就職活動をする時期はもちろん、それに臨む姿勢が変わったように感じます。何か一つこれをやりたいと軸を持って就活するのではなく、手当たり次第に会社を受けているように見える。

ところが、的を絞らずに就活している学生はいくつもの会社に行き、修士では専門研究に入る1年の秋に研究を中断してしまう。就活の早期化がもたらす悪影響の一つです。

―今の就活の状況では、しわ寄せは学生に来ていますか。それについてどう思いますか。

先ほど就活が理由の欠席は認めていないという話をしましたが、最終面接が期末試験とかぶっているという場合には再試などで対応しています。本来ならあまりしたくないのですが、やはり学生の進路決定は重要です。

ですがそもそも、学群3年（もしくは院1年）の3月にそんな重要な面接をしてはいけないのです。化学系では4年の秋にほとんど採用が決まっている状態です。企業側も、欠席の多い学生が欲しいはずはないのに、結果それを助長するようなことをしています。

―これから就活をする学生に向けて、アドバイスをお願いします。

「自分の将来やりたいこと」を早く見つけて、準備するということに尽きると思います。

就活は今や一つのイベントで、短期決戦のようなイメージがあります。しかし、付け焼き刃で手当たり次第面接を受けて受かる学生は、あまり見たことがありません。逆に、的を絞ってコンパクトに就活する学生は早く内定が出る傾向にあると思います。

不安から就活に走りがちな学生は多いですが、「研究の合間に就活をする」という意識を持つと、少し落ち着いて将来を見つめることが出来るのではないでしょうか。

視点

就活は前向きに

「就活は4年生の4月からが望ましい」と人事担当者は口を揃える。しかし就活の早期化は、解消されていない。学生は企業と大学の狭間で、不安を募らせている。

とはいえ世の中がおかしいからといって、遅る就活に背は向けられない。前向きに準備をすることも必要だ。まず自分を知るため、友人とインタビューを し合うと良い。自分を客観的に見直せる。だが向いている仕事は何か結論が出るとは限らない。「アラフォーの自分も、何が向いているか分からない」。人事担当者の言葉が鮮烈だ。

忘れてはならないのが、就活は小手先の技術で進める「作業」ではないということだ。面接者はその人からにじみ出る熱意を感じ取る。

「就活対策」のことばかりではなく、いま目の前にある学生らではの活動に打ち込む余裕があっても良いのではないだろうか。

HELLO! 先端科学

遺伝子組換えユーカリ

乾燥や塩水に強いユーカリ 途上国の紙やエネルギー源に

ペデストリアンで一の矢に向かう途中、第2エリアの外れに木が生い茂る一角がある―遺伝子組換えユーカリの試験栽培場だ。

遺伝子組換えユーカリは、04年から渡邊和男教授（生命産業）と菊池彰講師（同）が日本製紙などと共同でNEDO等からの支援を受け、研究が進められている。砂漠地帯の緑化や二酸化炭素の吸収など環境面のほか、エネルギー源や紙の原料として活用することで、途上国での産業振興にも貢献することが期待される。「ユーカリはさまざまな環境に適応することが分かっていたので、ユーカリの遺伝子組換えの研究を始めた」と渡邊教授は語る。

本来ユーカリは、8―10年で木材として利用可能な規模に成長。適応地であれば2、3年で相当成長する。推定では年間降水量1000ミリ程度でも良く育ち、サバンナ気候でも十分育つ。遺伝子組換え技術を利用すれば、さらに乾燥に強くなり、塩類にも耐え得る品種を生み出すことが出来る。現在、試験栽培を進める遺伝子組換えユーカリは、一般的に植物が枯れてしまうという海水の塩分濃度に近い濃度約3パーセントの塩水にも耐性を示した。

遺伝子組換えユーカリには、土壌細菌の一種が持つ耐塩性の強いたんぱく質を作る遺伝子が組み込まれている。遺伝子組換えは、他生物の遺伝子の一部を対象となるユーカリのゲノムに導入することで行う。その際、遺伝子銃や遺伝子組換え用に改良された細菌アグロバクテリウムを利用する。遺伝子組換えが済んだ後に抗生物質で細菌を除去。その後必ず遺伝子などが正常か確認する。

植物の品種により組換え可能な時期は異なり、ユーカリの場合は胚軸や細胞分裂の活発な組織で組換えを行う。遺伝子組換えユーカリは挿し木で増やし、塩分濃度や温度を極端に高くしたり低くしたりして、ユーカリが生存、成長出来るか専門的な方法で調査する。各行程が終了した段階で毎回、個体が正常かどうか評価する。

成長の早いユーカリは、エネルギー源に適している。また油分を多く含むため、ディーゼル燃料に活用出来る。ユーカリ由来の燃料で稼働する小型トラクターなど「きれいなディーゼル」が実現した。またユーカリ自体が新になるため、エネルギー源の6、7割を薪材に依存する途上国の燃料不足を解決し得る。

紙産業の発達も期待される。新興国で紙需要が大幅に増える一方、パルプの原料となる樹木が不足している。乾燥地帯に位置する国はパルプ源を輸入に頼っている。乾燥に強いユーカリなどを大規模に植林すれば、各国の紙需要に応えることが出来る。現在パルプの精製には大量の水が必要だが、セルロースが多く、木材繊維を固めるリグニンが少ない品種を作り、加工しやすく環境に優しいユーカリを開発中だ。

本学は6月、アフリカ開発銀行（本部・チュニジア）を通じて、乾燥地でも成長するユーカリの植栽を支援すると発表した。ユーカリの試験栽培は計画が進むアフリカのほか、パキスタンなどでも要望がある。しかし不安な治安情勢などの理由で、まだ実現していない。「さまざまなまだを尽くしているので、いつか実現するだろうと渡邊教授は語る。

第2エリアに茂るあのユーカリで、アフリカの大地が緑に染まる光景をいつの日か目にすることが出来るかもしれない。

（本紙・宇治田輝之＝国際総合学類）

遺伝子組換えユーカリ

（提供・日本製紙）

交換学生からの手紙

守谷市議会議員 高梨恭子さん

学生時代という言葉とともに思い浮かぶのは、平砂学生宿舎に植えられていたクチナシの白い花の香りだ。入学当時なかなか個を出せずに何かを求めていた自分を励ますように、むっとした梅雨時のあの香り。

農林学類という地味に思える学類で、有吉佐和子著の『複合汚染』を読みながら議論し、舞踏研究会に属し社交ダンスに没頭した学生生活。卒論のテーマとしてビルマ（ミャンマー）の革命を選んだことから「青年の船」に応募。ビルマを含め5カ国を各国の青年たちと国際親善のために船で回った。50日間の授業欠席をレポート等で単位を取得し教授の方々からは「能動的な学生」と評された。

就職はマスコミを希望し、3年生から土浦駅経由で東京まで2時間以上をかけて毎週マスコミ塾に通った。が、マスコミ関係全滅。滑り止めの電機メーカーに就職。1984年当時IT化はしりにのって、SEシステムエンジニア）として教育され、日本全国の支社にシステムを開発導入するという仕事を任された。福岡1週間の出張の帰りに乗った飛行機、羽田に着陸し、整備を終えて折り返し大阪に飛んだその機体は御巣鷹山に墜落した。OL時代の衝撃的な思い出だ。

出産退職後、8カ月の子供を保育所に預け、SEの経験を活かし、専門学校講師に。3人の子供に恵まれ、産前産後6週間という当時の産休制度の中で、保育ママさん、保育所、そして病気などあの手この手で仕事と子育てを両立出来たのは、常に社会と接していたいという強い思いからだったのだろう。

夫の仕事で、マレーシアの田舎に2年間暮らした生活を『マレーシア子育てメモリーズ』として、また、『子育てのことを『ざと日記』として出版した。この6月には子育ての合間に書き続けてきたものを3冊目の本『ママのアップリケ』として出版した。

今は以前に比べ子育て環境が整い、産休も長くなり育児休暇も設けられた。しかし女性が仕事と子育てを両立させるには、まだまだ壁がある。母となったその日から自分の中での優先順位は常に子供であることは間違いない。女性が持てる能力を発揮出来る社会にしたい と、守谷市議会議員の補欠選挙に立候補し当選した。仕事はこれからだ。

どうか皆さん、求めて下さい。そして日々の地道な努力を続けて下さい。輝く未来のために。

（昭和58年度農林学類卒）

育児と仕事に全力投球

スポーツの舞台裏

第8回　スポーツ感染症

まだ足りない現場での認識
学校・指導者も適切な対応を

感染症という言葉をご存じだろうか。大気や水、土壌、人を含む動物などに存在する病原微生物が人体に侵入して起こす疾患である。スポーツ活動に伴う感染症としては、プールなどで感染する咽頭結膜熱（プール熱）や、ウイルス性結膜炎などが知られている。感染症にかかれば、スポーツそのものが出来なくなる。

田神教授は機能Tシャツの研究もする

本学で感染症の研究をしている田神一美教授（体育）は、全国の小中学校に出向き、スポーツ感染の経路を調査している。田神教授は「スポーツ指導者は感染症について十分な知識を持つ必要がある。しかし現実にはまだまだ知られていない」と語る。

田神教授が調査をはじめたのは20年程前。当時は、学校も教育委員会も調査をせずに、学級やプールを閉鎖していた。大人たちがパニック状態になる一方、子供は学級閉鎖にはしゃいでいた。調査が不十分なため、二次感染が起こり被害が広がることが多かった。

最近になってようやく、衛生や感染症についての理解が得られるようになり、迅速な対応が行われるようになった。

埼玉のある小学校では健康手帳や活動記録を調査し、特定の児童から発症したことを突き止め「流行曲線」を描くことで、感染症が何月何日何時に発生したかが分かる。田神教授は「感染症について知ることで、学校もスポーツ指導者も冷静な対応をすることが出来る」と言う。

スポーツ感染症はプール以外の野外活動でも起こっている。スポーツを安全に楽しく行うために感染症の研究・知識が必要だ。

田神教授は最近「スポーツの傷害と障害をなくす」を編著者として筑波大学出版会から刊行した（定価1400円＋税）。同書では、体育・スポーツと健康問題を幅広い視点から考察し、スポーツによって生じる障害と傷害をどのように軽減し防げるかについて、解き明かしている。

（本紙・扇本剛司＝社会工学類）

日韓交流試合

本学とソウル大が対戦
教員派遣し講義も

ホッケー

スポーツを通して国際交流を図ろうと本学男子フィールドホッケー部とソウル大学校（韓国・ソウル市）ホッケー部の交流試合が8月20日、茨城県立東海高校（東海村）で行われた。試合は1−3で本学が敗れた。「力は均衡していた。ソウル大はサイドからセンターに玉を入れる典型的なパターンで攻めてきた」と同部顧問の征矢英昭教授（体育）は話した。

ソウル大ホッケー部がスポーツ教育で実績のある本学との交流を希望し、1995年から始まった本交流は今年で16回を数える。試合は隔年の8月に日本で行われ、昨年は同部がソウル大を訪れた。

日韓の交流を深めるため試合の他に同日、食事会を催した。ソウル大は21日、本学の施設を見学し、毎年交流を続ける二橋大学を訪問した。

ソウル大とボールを争うフィールドホッケー部（右）

本学はソウル大と互いに教員を送り、それぞれの大学で講義を行うなどの交流を続けている。征矢教授は「国際的な大学交流の面握することを目指したい」と語った。

第25回ユニバーシアード競技大会

スペイン破り7位
本学勢ブロック決める

バレー

大学スポーツの世界一を決める第25回ユニバーシアード競技大会が7月2−12日にセルビアのベオグラードで行われた。本学生および本学出身者が日本代表として出場した女子バレーボールは出場16チーム中7位だった。大会はイタリアが優勝した。

女子バレーボールの日本代表には、本学女子バレーボール部の皆本明日香（体専4年）、渡邊美穂（同3年）と、本学出身の水田耀未（久光製薬スプリングス・平成20年度体専卒）が代表として参加した。タイ、ロシア、スウェーデンとD組に入った日本は予選リーグを2位で通過。しかし準々決勝でポーランドに、5−8位順位決定戦で中国に敗れ、スペインとの7−8位順位決定戦に臨んだ。

第1セットは日本に硬さが見られ、ミスを連発して15−25で落とした。しかし続く第2セットは最初のテクニカルタイムアウトまでにリードすると、その後は水田と皆本の連続ブロックで一気に突き放し、25−8と大差でセットを奪った。

第3セットは一進一退の展開となったが、最終的に25−19でセットを取ると、第4セットは水田の活躍などもあって再び一方的な展開となり、最後は内田暁子（NECレッドロケッツ）で本学が、アジアの覇権を決める第25回ユニバーシアード競技大会が7月2−12日にセルビアのベオグラードで行われた。本学生および本学出身者が日本代表として出場した女子バレーボール部の皆本明日香（体専4年）、渡邊美穂（同3年）が優勝した。

女子バレーボールの日本代表には、本学女子バレーボール部の皆本明日香（体専4年）、渡邊美穂（同3年）と、本学出身の水田耀未（久光製薬スプリングス・平成20年度体専卒）が代表として参加した。タイ、ロシア、スウェーデンとD組に入った日本は予選リーグを2位で通過。しかし準々決勝でポーランドに、5−8位順位決定戦で中国に敗れ、スペインとの7−8位順位決定戦に臨んだ。

第1セットは日本に硬さが見られ、ミスを連発して15−25で落とした。しかし続く第2セットは最初のテクニカルタイムアウトまでにリードすると、その後は水田と皆本の連続ブロックで一気に突き放し、25−8と大差でセットを奪った。

第3セットは一進一退の展開となったが、最終的に25−19でセットを取ると、第4セットは水田の活躍などもあって再び一方的な展開となり、最後は内田暁子（NECレッドロケッツ）

つくばユナイテッドサンガイア

本学卒業生が入団
元日本代表 加藤陽一さん

つくば市を拠点とし、V・チャレンジリーグに加盟しているバレーボールチーム「つくばユナイテッドサンガイア」に、本学出身で元日本代表の加藤陽一さんが入団した。7月29日に入団記者会見が都内で行われ、先月1日に正式入社した。

加藤さんは大分県出身。1995年に本学に入学し、男子バレーボール部で96年からインカレ3連覇の原動力に。98年にはMVPを獲得した。

卒業後はV・プレミアリーグの東レ・アローズに入団したが、2002年に単身で伊セリエAのシスレー・トレヴィゾに移籍し、チームの優勝に貢献。その後はギリシャ、フランスなどを渡り歩き、05年にV・プレミアリーグのJTサンダーズに移籍した。本学在学中から全日本男子バレーの代表に選ばれ、その後全日本の主将となりチームを引っ張った。

のサービスエースで締めた。結局このセットは25−8で制し、セットカウント3−1で日本が勝利。5位だった前回には及ばなかったものの、7位で大会を終えた。

国公立大学選手権大会

男子が団体優勝

水泳

第56回全国国公立大学選手権水泳競技大会が、8月10、11の両日に北海道野幌総合運動公園プール（江別市）で行われた。本学からは37人が出場した。

男子は団体優勝。女子は、1位の鹿屋体大に3点差で及ばず、惜しくも2位となった。

武田剛ヘッドコーチ（体育センター準研究員）は「インカレへのステップとしての大会。女子は団体優勝出来す、選手の勝負に対する執念が甘いと感じた」と、今大会を振り返った。一方、50メートル・100メートル自由形で自己ベストを出し、優勝した岩崎佐代子（体専4年）については、「かなり記録が良かった。インカレで上位も狙える」と武田ヘッドコーチは語った。

インカレは今月4−6日に開催される。武田ヘッドコーチは「順位にこだわり、団体で好成績を残したい。大会期間が3日間と短く、消耗戦となるため、チーム全体の集中力を持続させたい」と語った。

第57回全日本学生剣道選手権

男子 個人戦で優勝、3位
団体戦にも期待

剣道

第57回全日本学生剣道選手権大会が7月4、5日に、大阪府立体育館（大阪・浪速区）で行われた。本学から4人が出場し、西村英久（体育3年）が優勝、寺島光紀（同4年）が3位となった。

西村は終始、危なげなく堂々とした戦いを見せた。東農大の松尾修平を面で降し、初優勝を飾った。

寺島はいまひとつのコンディションで大会に臨んだ。2回戦では苦戦したものの、3回戦から調子を取り戻した。7回戦の序盤で自分のペースに持ち込んだが、打ち込んだ面を返し胴で返され、流れが変わった。「全日本は大学4年間で初の出場、思い残さず全力を出し切れた。次は全日本学生剣道優勝大会の団体戦で挽回したい」と意気込みを見せた。

また、個人戦に続き行われた男子20人勝ち抜き制の全日本学生剣道東西対抗試合では、東軍が大将・寺島の3人抜きで西軍に勝利した。

鍋山隆弘監督（体育・講師）は「しっかりと自主練習をするという良い伝統が戻ったことが結果に繋がった。全日本学生剣道優勝大会の団体戦での寺島、西村の結果に期待したい」と語った。

第5回全日本学生ラート競技選手権

男子 個人、団体制す
女子 種目別で二冠

体操

競技選手権大会が8月15、16日にかけて、つくばカピオアリーナ（つくば市竹園）で開催された。個人総合で江塚和哉（体専4年）が優勝、黒田ふゆ子（同）が3位に入った。また、男子団体でも五連覇を果たした。

6月に行われた世界選手権で銅メダルを獲得した江塚は種目別競技でも直転と斜転で二冠を達成した。また、吉永直嗣（エンス4年）が直転と跳躍で2位につけ、男子総合でも準優勝した。二人の大車輪の活躍で団体優勝に大きく貢献した。

女子の部では、三宅麻衣子（体専3年）が斜転と跳躍で二冠を達成、直転でも2位についたが個人総合では4位におわった。

監督の本谷聡講師（体育）は、「本学生同士でメダルを競い合うなど、本学のレベルが確実に上がっていると感じた。日本でも世界でも活躍出来るように、個人がさらにレベルアップして努めて欲しい」と述べた。

男子個人総合で優勝した江塚選手

筑波大学出版会

次の2冊が刊行された。購入は書籍部、書店等で。

◆「水泳パフォーマンスの最新理論」野村武男編著3990円

本学水泳部長として五輪メダリストら多くの選手を育てた野村武男本学名誉教授を編著者に、本学内外研究者21人の共著。自然科学的な実験データから水泳パフォーマンスの最新理論に迫る。流体力学による最速の泳動作解明、コーチングに役立つパフォーマンス評価法、健康維持増進にも効果的な水中運動など。

◆「企業城下町の都市計画」中野茂夫著5460円

しょうゆの野田、紡績の倉敷、重工業の日立という三つの企業城下町の都市形成の歴史を企業の戦略を読み解きながら探り、工業立国日本の近代都市計画の特質とは何かを考える。著者は本学大学院環境科学研究科準研究員を経て、現在、日本学術振興会（京都工芸繊維大学）特別研究員。

ダンスフェスティバル

第2位のNHK賞を受賞

テーマは身近な愛の大切さ

難易度の高い演技も

全国から毎年100を超える高校・大学が集まり演技を競う、第22回全日本高校・大学ダンスフェスティバルが8月4－6日の3日間、神戸文化ホール（神戸市中央区）で開催された。本学ダンス部は2位の団体に贈られるNHK賞を受賞した。

本学ダンス部の演技（提供＝フォトスタジオ八木）

大会は、学生・生徒の創作作品の審査が行われる創作コンクール部門と、ヒップホップなどさまざまな種類のダンスが披露される参加発表部門に分かれている。本学ダンス部は創作コンクール部門大学の部に出場し、30校が出場した予選を勝ち抜き、20校が出場した決戦で競演した。

今回発表した作品は「泥に咲く－『白夜行』より－」。東野圭吾の小説「白夜行」で描かれる、罪でつながる男女の絶対的な愛をモチーフにして、ダンス部の3年生全員でダンスを作った。今自分がここにいるのは周りの愛があるから、と身近な愛の大切さに気づくことをテーマとし、それをダンスで表現した。

総勢30人での演技では、舞台いっぱいに広がる大きな白い布で目に見えない支え合いを表現し、白い布の下の人と上の人が一緒に踊るという、難易度の高い演技も見せた。また、終盤では死のもたらす切なさを表現し、多くの部員が自然に涙を流しながら踊った。

主将の嶋田絵理奈さん（体専3年）は「作品の世界に入って集中し、最高の演技が出来た。創作を始めたときには賞のことは考えられなかったが、結果を聞いて嬉しかった」と語った。

関東甲信越体育大会

バスケ

女子6年ぶり優勝

男子は準優勝

第58回関東甲信越大学体育大会が8月17日－9月1日にかけて、20の会場で開催されている。関東甲信越地区にある13の国公立大学の学生たちが参加し、熱戦を繰り広げている。

17、18日に横浜市立大学体育館（横浜市保土ヶ谷区）で行われた男女バスケットボールでは女子が6年ぶりに優勝、男子が準優勝した。

女子は準決勝まで圧倒的な力を見せ、よいムードで決勝の信州大戦を迎えた。一進一退の攻防が続いた末、リードを守りきり71－67で勝利した。

男子は茨城大、横浜国立大には順調に勝ち進んだが、決勝の信州大戦では終始リードを許し、76－93で敗れ準優勝に終わった。

夏期の間、女子を指導した牧美由紀さん（体専4年）は「夏で一番いい試合が出来た。秋に向けオフェンスを充実させたい」と語った。

第17回全国大学女子サッカーフェスティバル

サッカー

33大学が本学に

今年のテーマは『交流』

夏の大学女子サッカーの祭典「第17回全国大学女子サッカーつくばフェスティバル」が8月7－9日まで本学内の各グラウンドで開催された。

本大会は「女子サッカーの普及と発展」をテーマに、大学女子チームに試合の機会を提供する目的で開催されている。今年は33大学、39チームが参加。本学からは2チームが出場した。

競技は11人制の一般リーグと、8人制のチャレンジリーグに分かれて行われ、人数不足のチームにも試合の機会が提供された。また試合以外にも、東西のオールスターによる東西対抗戦や、各講習会などが開かれた。

また、昨年好評だった少女サッカー交流イベントが今年も開催された。小学生にサッカーの楽しさを感じてもらうよう、サッカーを通して小学生と大学生の交流が図られた。

本大会は本学女子サッカー部員が広報から運営まで行っている。河村瑞紀大会実行委員長（社工3年）は「運営面は大変なことがあったが、試合を楽しんでもらうなど充実感がある。今年のテーマは『交流』なのでいろいろな人と親睦を深めてほしい」と話した。

今大会について、井上卓哉本学女子サッカー部ヘッドコーチ（体育2年）は、「女子サッカーの底上げと普及の面で大きく貢献している大会だ。チームとしてはリーグ戦を勝ち抜いてインカレ出場を目標に頑張りたい」と語った。

◇

本学の結果は以下の通り。

筑大HOTCH3－1武蔵川女子大▽筑大H4－1福岡大▽筑大H2－0吉備国際大

筑大POTCH0－2東京女子体育大▽筑大P1－0和歌山大▽筑大P0－0（PK4－3）関東学園大

小学生との交流風景

世界に羽ばたく高校生選手強化事業

将来の五輪選手を育てる

県内の有望選手が参加

茨城県内の有望な高校生スポーツ選手を対象とする「世界に羽ばたく高校生選手強化事業」が、今年度の新規事業として始まった。茨城県教育委員会が主催し、本学との連携もとられている。同プログラムは将来、国際大会などで活躍出来る選手の育成が目標だ。

対象者は県内の高校に通う1、2年生で、全国大会での入賞を期待される選手や将来性豊かな資質を有する選手60人程度。受け入れ可能な競技は、陸上や競泳を始めとする15種目。また、指導者の育成・資質向上も目指し、高校生を指導する運動部の顧問も対象となる。参加者は推薦書に基づき教育委員会が決定した。

日程は今年の6月から来年3月にかけて計10日間開かれ、本学の体育施設を会場としている。毎回、午前中がトレーニング学やスポーツ栄養学、スポーツ心理学の専門家による講義、午後は各種目の本学運動部の練習に参加する。

同プログラムの第3回目は7月22日に5C604教室で開かれ、13人の高校生が参加した。一つ目の講義は、「スポーツとからだのケアI」で、本学のスポーツ医学専門家の向井直樹准教授（体育）が担当した。ケガの予防や応急処置などについて話した。講義中はスライドを使ったり、正しい筋肉の使い方をチェックするポージングを参加者全員が試す場面もあった。

二つ目の講義は、スポーツ運動学から「技術が上手くなるためにはI」で、佐野淳教授（体育）が担当し、技術が上手くなるプロセスについて話した。

参加した石川敬人さん（茗渓学園高校1年）は「講義にあった筋肉を鍛えるメニューを練習に取り入れたい」と感想を語り、楠康成さん（東洋大学附属牛久高校1年）は「大学の先生には元有名選手もいてスケールが大きい」と話した。

全日本学生テニス

テニス

女子が準優勝

専修大に敗れる

第53回全日本学生テニス選手権大会（女子）が8月6－15日にかけて、有明テニスの森公園（東京江東区）で開催された。女子ダブルスで前澤かおる（体専4年）と品田祐希（同3年）が専修大学に敗れ準優勝した。

前澤・品田組は第6シードで準々決勝まで、すべてストレート勝ち。準決勝では早稲田大に1セット落としつつも破り決勝に駒を進めたが、14日に行われた決勝ではノーシードの専修大の重藤・難波組に3－6、4－6のストレート負けを喫した。

「決勝までに早稲田大のトップ2を破り、勝てるかもという状況があった。しかし、相手の調子もよく、力を出し切れなかった。次の大会に向け、チームプレーを徹底して欲しい」と山田幸雄監督（体育・教授）は話した。

スポットの顔

光るプレーで世界に挑む

170センチメートルの高身長とはいえ、細身の彼女。しかし、その細い体からは想像もつかないほどの、力強いドライブインが彼女の持ち味である。彼女の名は、淀野潮里（体専1年）だ。U－19の日本代表に選ばれた、女子バスケットボール部の注目株である。

淀野がバスケットボールを始めたのは、小学2年生のときだ。兄のバスケットボールの練習についていくと、女子メンバーの数が不足していたため、助っ人に抜てきされた。小学3年生からは練習に真剣に取り組んだ。

地元の中学校に入学すると、バスケットボール部に入部。礼儀面・体力面を中心に、これでもかというくらいしごかれた。淀野は「すごくきつかった。でも、自分の基盤が出来た」と振り返る。淀野のプレーは当時から光るものがあり、県選抜に選ばれた。これをきっかけに、淀野の意識は変わった。「どうせやるなら、上を目指したい」と思い、茨城県のバスケットボール強豪校、土浦日大高校に進学した。

高校で淀野は、バスケットボール以外でも大きな収穫を得た。それは、親元から離れて寮生活を送るということだ。高校1年のときはホームシックを経験した。3人部屋でほぼ毎日自炊。入学に反対した両親を振り切って来ただけに、「へこたれて親に泣きつくことは出来なかった。電話も自分からはしなかった」と淀野は語る。

寮生活にも慣れてきた高校2年の夏、熾烈な代表争いを勝ち抜き、淀野は見事U－18の日本代表に選ばれた。そのときのことを淀野は、「入ると思っていなかった。素直に嬉しかった」と振り返る。

そして高校3年の11月、自身初の国際試合である、アジア大会が行われた。今アジアには高身長の選手が多く、激戦地域の1つだ。その中で日本は、体格面で劣っている。しかし淀野は、「相手が大きくて強いのは分かっていた。自分たちのバスケをすることに専念した。自信もあった」と言う。そんな淀野や他のチームメイトの積極的な姿勢が功を奏し、世界選手権の切符を獲得した。

世界選手権は今年の7月23日－8月2日に行われた。淀野は交代で出ることが多く、「悪い流れを断ち切ることを意識した。3ポイントとドライブに集中した」と言う。日本は16チーム中12位。海外の選手は体の当たりが強く、また審判も笛を吹かない。「当たられても当たり返すだけの力を身に付けなければ」と淀野は語る。

女子バスケットボールU－19日本代表

淀野潮里（体専1年）

そして淀野は、小学生以来の夢を叶え、本学に進学。入学していきなり日体大戦に出場し、ハーフライン後方からのブザービーターを決めた。「奇跡のシュート」と言い、自分でも驚いていた。しかし、「勉強は難しい。単位が心配」と、他の学生と同じような不安も感じている。

憧れの選手は本学出身の有明葵衣（2008年体専卒・現富士通レッドウェーブ）だ。中学3年のとき知人の紹介で会って以来、助言をもらったり、一緒にご飯を食べに行ったりしている。世界大会に向けた合宿で富士通レッドウェーブと練習試合をし、再会した。休憩時間でも筋トレをする有明の姿を見て、「自分に厳しく、努力家。少しでも有明さんに近づけるよう、自分も努力する」と語った。

努力し続け、プレーにさらなる磨きをかける淀野から目が離せない。（本紙・牛尾仁実＝社会学類）

世界からの教室

「日本」への眼差しと向き合う

キエフ国立大学（ウクライナ）
秦野　貴光

ウクライナは日本人にとってあまり馴染み深い国ではない。知っていることといえば、「チェルノブイリで起きた、あの惨憺（さんたん）たる事故」程度ではないだろうか。多くの日本人にとって、ウクライナは遠く離れた「周辺」にほかならない。

だが、ウクライナの面積はロシアに次ぐヨーロッパ第2位、人口もドイツ、イギリス、フランスなどに次いで多い。フランスの約2倍の耕作面積を誇り、ソ連から受け継いだ科学技術の水準は高い。歴史的には後発国だが、潜在能力には計り知れないものがある。

現在、私は首都キエフにあるタラス・シェフチェンコ記念キエフ国立大学に留学している。血の色に塗られたキエフ大学の校舎は、日中は力強い印象を見る者に与え、夜はどこか薄気味悪い雰囲気を演出する。大学の向いの公園には、ウクライナを代表する国民作家タラス・シェフチェンコの巨大な像が厳しくそびえ立っている。

キエフ大学はウクライナを代表する大学であり、世界各地から毎年多くの学生が集まる。そのためロシア語の授業はとても国際色豊かだ（公用語はウクライナ語だが、ここキエフでは露語も日常的に使われる）。彼らがここで学ぶ理由は十人十色で、将来ウクライナで起業するためにロシア語を学んでいる人もいれば、旧ソ連圏などにはるばるやって来た人もいる。

大学の仲間との1枚（中央右が秦野さん）

授業では積極的な発言を求められ、少人数制の採用と相まってか、非常に活気に満ちている。文法や会話の練習のみではなく、文化や歴史を通じてウクライナに親しみを持てるよう、先生方は工夫を凝らして授業をしている。授業や生活に慣れるまでは歯痒い思いの連続だが、相手に自分の意思が伝わったときの達成感は何物にも代えがたい。異なる価値観やバック・グラウンドを持つ人たちとの会話は刺激的で、いくら話しても飽きを知らない。

冒頭、日本人にとってウクライナは遠近な国ではないと書いた。しかし、ウクライナの人々は、我々の想像以上に親日である。「日本文化」に興味を持つ人々は多く、特に文学、音楽、あるいはアニメなどは多くの人々から注目を集めている。

「ケンザブロウ・オオエの本は読みましたか?」、「ハルキ・ムラカミの小説のどれが好き?」、どちらも実際にされた質問だ。また、日本の伝統的な慣習（「年功序列」など）についても質問されたこともある。

もちろん、それらは日本の多様な文化の一面にすぎないが、ウクライナの人々が括弧つきの「日本」に関心を持っている、という事実は否定出来ない。

1991年に独立を達成し、2004年のオレンジ革命で民主化を経験したウクライナ。しかし、国内では改革が遅々として進まず、昨今の経済危機に見舞われ、対外政策では欧州連合（EU）とロシアの狭間で揺れ動いている。

そんな「周辺」から「日本」に向けられる曖昧眼差し=期待に対して、私たちはどう向き合い、どう応えてゆけるのか。この大切な課題から目を背けずにいたい、そう思った。

（国総3年）

和太鼓実習の成果発表

プロ奏者林英哲氏が指導
ダンスとのコラボ演奏も

和太鼓実習の成果を披露する「身体表現論」履修者たち

本学大学院共通科目「身体表現論―和太鼓の実習を通して―」の実習成果発表会が、7月3日に行われた。

参加者らは、プロの和太鼓奏者である林英哲（はやし・えいてつ）氏のもと、3日間の和太鼓実習を受けて発表に臨んだ。実習には体育学専攻の学生など45人が参加した。

発表は受講生を半分ずつの2グループに分けて行われた。舞台には大小さまざまな和太鼓が十数個並べられ、参加者が緊張した面持ちで演奏を披露。中盤ノズムに乗ってくると、バチを振り上げるパフォーマンスも大きくなり舞台には熱気が満ちた。

またグループ発表の間には、林氏による演奏や、和太鼓とダンスのコラボレーション演奏が行われた。

発表会に訪れた女子学生は「短期間であれだけの演奏が出来るとは驚いた。高い音から低い音まで太鼓の出す音を堪能出来た」と感想を話した。

講師を務めた林氏は「海外の大学では、和太鼓の授業が正式な単位になるなど注目が集まっている。国内でももっと多くの人に広めていきたい」と語った。

大学説明会

学群・学類の特色伝える
9684人が参加

「受験生のための筑波大学説明会」が7月28―30日の3日間にわたり筑波キャンパスで開催された。昨年より737人多い9684人が参加した。

当日は各学群・学類ごとに、大学見学ツアーや在校生による学生活の体験談の発表など、多くの催しが行われた。また、アドミッションセンターの職員が受験相談コーナーを設け、受験生へ情報提供を行った。

国際総合学類の説明会では前川啓治教授（国共）による模擬講義が行われた。講義ではマクドナルドという身近な例が用いられ、グローバリゼーションについて分かりやすい解説があった。会場の高校生たちは時折うなずきながら興味深そうに聞いていた。山形県から参加した高校3年生の女子生徒は「グローバリゼーションには色々な捉え方があるということを知って勉強になった」と語った。

知識情報・図書館学類の説明会では、長谷川秀彦教授（図情メ）が『知』のネットワーク」と題して模擬講義を行った。長谷川教授は、ユーモアを交えつつ資料の保存・整理の必要性や重要性について語った。講義テーマの『知』のネットワークについては「ネットワークによってさまざまな場所につながりが出来る。図情はそのすべてを扱う」と語った。群馬県から参加した高校3年生の女子生徒は「この学類で学ぶ内容にもともと興味はあったが、講義を聞いて意欲がより高まった。説明会に参加して良かった」と話した。

また、日本語・日本文化学類の説明会では、卒業生による進路報告があり、北京での日本語教師の体験を興味深く語った。

3日間ともおおむね好天に恵まれ、キャンパス内は高校生たちの活気にあふれた。

鳥人間コンテスト中止

「つくば鳥人間の会」に衝撃
単独記録飛行を行う

「大空を自力で自由に飛ぶ」という夢の実現を目指し、毎年7月に行われていた「鳥人間コンテスト」。今年1月、主催の読売テレビが2009年開催中止と10年開催態を発表した。

本学からは毎年「つくば鳥人間の会」が参加しており、中止に衝撃を受けたという。これを受け、つくば鳥人間の会は7月20日に単独で記録飛行を行った。

つくば鳥人間の会は、鳥人間コンテストで、離陸からスタートラインに戻るまでのタイムを競う「人力プロペラ機トライアル部門」という競技に出場していた。今年は大会中止ということでテレビを意識せず、デザインを変えたり、技術改良を加えるなど新しいことに挑戦したという。

「中止と聞いた時はショックだったが、モチベーションを下げずに完成を、来年への参考にしてほしい」と部長の宮坂亜美さん（地球3年）は話した。

単独で記録飛行を行った「つくば鳥人間の会」

放置自転車

撤去相次ぐ
防犯登録を

つくば駅周辺の自転車等放置禁止区域に放置された本学生の自転車やバイクなどが撤去される例が、今年だけで60件あった。防犯登録をしていれば引き取り通知書が届くが、宿舎からの移転などで住所が変更され、引き取り通知書が届かないという問題が相次いでいる。本学はポスターを掲示し、「該当者は関係機関に連絡すること」などを呼び掛けている。

フロンティアーズ

お年寄りと交流
うちわ作り行う

学生団体「筑波大学フロンティアーズ」によるワークショップが、㈶筑波メディカルセンターのディサービス「ふれあい」で7月9日、11日に行われた。

「うちわをつくろう」と題して、本学生とお年寄りがインクで染めた紙をうちわに貼り、オリジナルのうちわを作った。本学生が一人ひとりのお年寄りの横について、作り方を丁寧に教えていた。作った後は、それぞれの作ったうちわを前に貼り出し、みんなで鑑賞した。作った人によって染め上がりが異なり、趣のある作品になった。

筑波大学フロンティアーズの小野千代子さん（芸術前期2年）は、今回のワークショップについて「作った作品よりも、プロセスが大事。お年寄りに喜んでもらえて嬉しい」と語った。

お年寄りと一緒にうちわを作る本学生

学生論壇
社会への声

福祉へのイメージ再考を

少子高齢社会と言われる現代、それにあわせるような形で、社会福祉に関する議論が盛んになされている。この度の衆議院議員選挙に際して各政党が発表したマニフェストでも、それぞれ社会福祉政策について触れている。その内容を見ると、介護・福祉職の労働環境改善、福祉施設の施設数増加など、昨今問題とされている事柄に応じるものが多い。私はこの場で各政策の是非を論じるつもりはないが、確かにこうした環境面での整備は必要であろう。特に介護・福祉職の労働環境については、人材不足、離職率の高さや低賃金などさまざまな問題が挙がっている。労働者の意欲を高め、これらの問題を解消するためにも、労働環境の見直しは急務である。

ところで、こうした労働環境についての問題は、そもそもなぜ起こったのだろうか。私はその一因として、日本人の福祉に対する考え方を挙げたい。あくまで個人としての印象ではあるが、日本人は福祉、あるいはその従事者を高尚なものとして考え過ぎているように思う。私自身、友人に自分がボランティア活動を行っていることを話すと「立派だね」と言われることが何度となくあった。思うに、この一言に多くの人の福祉への考え方が端的に現れているのではないだろうか。

私は自分の奉仕的な精神が人と比べて強いなどと考えたことはない。私が福祉に関する活動に向かう際の原動力は、例えるなら趣味に向かうそれに近いものだろう。決して人助けや社会貢献の精神だけで動いているわけではない。介護・福祉職に従事する人もそうであろうと思う。彼らにそうした精神が全く無いとは言わないが、彼らはあくまでプロであり、介護や福祉を生業としているある種の技術者なのである。ハード面の整備はもちろんだが、今まで作り上げられた「高尚な」福祉像を崩し、福祉をもっと現実的に見ていく。そんなソフト面での改善がなされない限り、社会福祉の問題の根本からの解決は無いように思う。（社会福祉研究会・今坂雄一郎＝心理3年）

第3回 3Eフォーラム

「つくば環境スタイル」を考える

藻類燃料の情報交換を行う
各機関の連携を促進

つくば国際会議場（つくば市竹園）中ホールで先月8日、第3回つくば3Eフォーラム会議が開催された。

同会議は、2007年10月に発足して以来学と周辺の研究機関、つくば市、県などが連携してさまざまな課題に取り組むため行われている。環境と経済、エネルギーに関する連携研究や開発を主要な対象に設定し、今年で第3回を迎えた。

今回の会議では、つくば市で今年3月に策定された「つくば環境スタイル」行動計画に、大学や研究機関、産業界、市民、学生らがどのように関わり協働していくかをテーマの1つとし、活発な議論が交わされた。

また今大会は、藻類燃料研究がバイオ燃料の普及につながる可能性を持つことから、先月東京で開催された第9回国際藻類学会のサテライトシンポジウムとしても位置づけられ、藻類燃料研究及び科学技術政策の情報交換が行われた。

会場入り口ではつくば市ほか各種団体からポスターセッションや展示が行われ、環境に関する取り組みやアイデアが紹介された。

参加したシス情1年の男子学生は「藻類燃料に関する話を初めて詳しく聞いた。研究がかなり進んでいることに驚いたと話した。

3Eフォーラム議長の井上勲教授（構造生物）は「以前はつくばの各研究機関や大学などではばらばらに環境に関する研究がなされていたが、この会議をきっかけに、いろいろな課題に連携して取り組めるようになれば嬉しい」と語った。

藻類燃料について話すパネラー

ひらめき☆ときめきサイエンス
作物の起源と進化学ぶ

中高生を本学に招いてのイベント「DNAから作物の起源と進化を探る」が7月31日「ひらめき☆ときめきサイエンス」のプログラムの一つとして行われた。

奥野員敏教授（生物圏）が講師を務め、今回は高校生14人と中学生1人、保護者数人が参加した。

午前中は奥野教授や院生の講演が行われた。数々の研究の内容がスクリーンに映し出され、参加者は生物の進化や多様性とDNAの関係の深さを学んだ。作物の歴史についても、クイズを交えて学んだ。

午後は場所を実験室に移し、イネの葉を使ってのDNA抽出実験を行った。参加者たちは院生の助言を受けながら実験を進め、全員が試験管にイネのDNAを抽出して観察した。実験の合間には、院生が実験器具の解説をしたり参加者の質問に答えるなど、和やかな様子が見られた。

高萩市から来た高校生の関場歩美さんは、「昨年も参加したが、前回よりきれいにDNAが抽出出来て良かった。将来はこういう仕事につきたい」と感想を話した。プログラムを開いた奥野教授は、「参加者にはこの体験を通して、感じたことを明らかにしようとする積極的な姿勢を持つようになってほしい」と話した。

「ひらめき☆ときめきサイエンス」は、独立行政法人日本学術振興会（JSPJ）が推進。小中高生が科学研究費補助金に支援された最先端の研究成果に直に触れることの出来る事業だ。科学と日常生活の関わりやその意味を理解してもらうことを目的としている。

今年度は全国123の機関で、208のプログラムが行われる。本学では11月28日に「宇宙を見よう 世界天文年2009つくば」、12月13日に「深いぞ 凄いぞ 日本の武道！ 文化としての剣道の魅力」が実施される予定。

高校生が真剣な眼差しで実験を行った

ギャラリーカフェ「じんぱち」
地域と本学生 密な交流
つくばの魅力発信地へ

本学がつくばの地に開学してから35年。本学生は地域とともに成長してきた。しかしながら、本学生が大学の外に目を向けることは意外に少ない。学生の生活が大学の中だけで完結してしまう傾向があるようだ。

そんな中、本学生が地域交流ギャラリーカフェ「じんぱちカフェ」を開いた。居酒屋「じんぱち」（つくば市天久保）の店舗を週末の昼間だけ借りて経営した。学生による情報発信の場として話題になり、8月2日まで開かれた。

店内では、通常のカフェの営業に加え、本学生による作品の展示も行った。店頭では、本学の生物資源学類の学生有志で作る サークル「のうりんむら」が提供した野菜の販売を行った。

カフェの代表は中谷 穂さん（国総4年）。中谷さんは本学生が大学の外に積極的に出て行かないため、つくば市のことを「ほとんど知らないまま卒業してしまうことに疑問を持っていた。「筑波大生の意識を変えたい」「つくばの魅力をもっと多くの人に知ってもらいたい」という思いを1年ほど前から抱くようになり、これがじんぱちカフェ開店のきっかけとなった。

今年の1月中旬から本格的に準備を始め、3月8日に1日限りのプレオープンという形で開店にこぎつけた。そこでの反響が大きかったため、4月中旬から定期的に営業していくことになった。本来は6月末までの予定だったが、最終的には8月の第1週まで4カ月近く続けることが出来た。

友人の作品を見に来たという芸専3年の女子学生は「初めて来店したが、店の雰囲気がとても落ち着いていて良いと思った」と語った。また、十数回来店しているという国総4年の女子学生は「何と言ってもコーヒーがおいしい。気軽に来ることが出来てくつろげる」と語った。

中谷さんは「じんぱちカフェはギャラリーのほうに重点を置いているが、カフェを自当てに来店する人が多かった。また、カフェを作っただけでは不十分で、情報発信が必要だということを痛感した」とこれまでの感想を語った。

「じんぱち」の経営者の広田美津子さんは「学生が店をこぎやかにしてくれるのは良かった。今後も意欲のある学生を積極的に支援していきたい」とじんぱちカフェの活動を評価する。

「今後は、地域のお店と協力して作品展示やワークショップなどをやっていきたい」と話す中谷さん。「つくばの魅力の更なる発信」を目指し、中谷さん達の活動は続く。

友人と午後のひとときを過ごす

筑波大学自動車部
五感駆使して疾走

「アクセルを踏むことより、踏まないことを先に覚えるんだ」。先輩に指導を受け、後輩の運転する車が勢いよくコースに駆け出す。窮屈な椅子に、体を締めつけるシートベルト。エンジンの熱を逃がすため、真夏でもヒーターをかける。長袖を着てハンドルを握るグローブの手が凛々しい。

これは、筑波大学自動車部のジムカーナの練習風景。ジムカーナは、タイムトライアル形式の競技。広い場所に配置されたコーンを、指定通りの順路で車を走らせる。1台ずつコースを走り、速度も出にくいので、初心者から上級者まで安心して楽しめる種目だ。

ターンへ向けてのシフトチェンジとブレーキ操作にカーナだけでなくサーキットでのレースやラリーなどに挑む部員も多い。東日本ラリーなどに出場し、何度も上位入賞しているOBもいる。

「苦労もあるが、愛車の整備が一番の楽しみ」と部長の小濱勇希さん（工シス4年）は語る。

部員は座学だけでなく、実地でも運転や整備を学ぶ。自動車部が「実学」の理念を持っているからだ。

「ラリー観戦に出かけたり、整備を手伝ったりして楽しい。免許を取ったら、自分の車を持ちたい」と村田一樹さん（応理1年）は話す。

他大学生も参加している。一ノ関友行さんは明治大生。「誰でも気兼ねなく参加出来る和気あいあいとした雰囲気があること」と自動車部の魅力を語る。

「AT車やファミリーカーには無縁に思えるモータースポーツだが、決してそんなことはない」と小濱さんは話す。競技車はもちろん、「普通の車」でも楽しめるジムカーナ。ドライバーの気分次第で、たとえ軽トラックでもモータースポーツを楽しめるのだ。

自動車部のミーティングは毎週木曜日午後6時から、工学システム学類棟2階ラウンジで行われている。（本紙・余聡＝人文学類）

●●●●●●●●●●

本学自動車部の小濱勇希さん（工シス4年）・石井貴大さん（工基礎4年）組が、先月22、23日に群馬県赤城山で行われたJMRC群馬ラリーシリーズ第3戦 Play－Stageラリーに参戦。上位クラスを抑えて総合優勝を果たした。

麻薬乱用撲滅デー
学長が注意喚起

本学は6月26日の国際麻薬乱用撲滅デーに合わせて、「薬物乱用根絶宣言」を発表した。山田信博学長は「禁止薬物の危険性に留意し、健全な大学生活を送ることを切望する」と学生に呼び掛けた。

本学はこれまでに「大麻等に関する緊急警告」を発したり、フレッシュマン・セミナーで新入生に資料を配付して、安易に薬物に手を出さないよう注意を喚起してきた。

第35回雙峰祭

今年は「ミス☆キャンパス」

第35回雙峰祭が10月10―12日の3日間開催される。今回のテーマは「一途に筑波、それゆえ筑波」。学園祭実行委員会主催の本部企画では、サイエンスナビゲーターの桜井進氏や、本学の土井隆義教授（国共）が講演会を行う。また、受験生向けに「受験生応援企画」といった学術企画もある。

昨年の「集まれ☆筑波女!」の流れをくみ、12日には「ミス☆キャンパス」が開催。美しさにとらわれない、より自己表現を重視した内容となっている。

その他にも、フリーマーケットの「Re:cycle@筑波―がらくたまつり―」（10―12日）、こどもステージの「ポプリン　―不思議な森の咲かない花―」（10―11日）、著名な芸人を招いてお笑いライブを行う「お笑え!!2009」（13日）や、毎年人気のホラーハウス「02：59」（10―12日）なども企画されている。

今年度から新たにFelicaを利用した「いん☆まいかーど!でじたるフェアリーぴぴっと★ちゃんー近未来型スタンプラリーー」が催される。ICカードが導入された本学の学生証はもちろんのこと、Suicaやおサイフケータイなどを用いてスタンプラリーに参加出来る。

内定者懇談会

学群3年と院1年が対象

筑波大学就職支援団体Jewelが、9月17日午後3時―午後5時半に大学会館3階の特別会議室と第一会議室で内定者懇談会を開催する。

このイベントは、2011年卒業・修了予定の学群3年生と大学院1年生を対象として開かれるもので、就職内定者と意見交換を行うことで就職活動に対する不安解消やモチベーションの向上を図ることを目的としている。

申し込みは不要で、参加・入退場は自由。お問い合わせ＝jewel_contact10@yahoo.co.jp

Who's Who?

コミュニティFM開局に尽力

尾形　理さん（教育研1年）

ラジオ開局まで苦節3年
後輩に伝える「番組づくり」

ラジオつくば本社（つくば市吾妻）のスタジオで

ヘッドホンをはめ、マイクの前に立ち、すっとフェーダー（音量装置）を上げる。スタジオの空気が一瞬にして張りつめる。「どうも皆さんこんばんは。TSUKUBA UNIVERSITY RADIO NETWORKの時間です」。よどみない口調がポップな音楽と共に流れ出し、「TURN」（筑波大生の声を届けるラジオ番組）が始まる。筑波大学ラジオ運営局の代表である尾形理さん（教育研1年）は今日もマイクの前に立つ。

つくば市に地域密着型のコミュニティFMをつくると聞いたのが1年生の時。「学生と市民をつなぐラジオ局」というコンセプトにひかれ、開局活動に参加した。

「開局への道筋は、ゴールの分からない真っ暗な道を手探りで進んで行くようだった」と振り返る。毎年のように「来年は開局予定」と言われ、開局した時に学生制作番組を作っていくために、フリートークやラジオ独特の言い回し、ミキサー（音響装置）の使い方の練習を繰り返した。

しかし、開局への道のりは遠かった。周りの仲間が開局をあきらめ、一人また一人と減っていく中、残ってくれている仲間を代表として引っ張らねばならない。まさに、孤軍奮闘の時が続いた。

自身もあきらめかけた3年生の春、突然開局が認可される方向で動き出した。それを聞いた時には「え、本当にやるの!?」と驚いたという。その後、市民の中からも開局を共に目指す人たちが現れ、道がどんどん明るく開けていった。

開局半年前からはネットラジオの配信が始まった。当時の目玉番組で気が付けば自分もミキサーを操りながらしゃべるようになっていた。「最初は喋る自信もなくPA（裏方）に徹するつもりだった。それがまさかしゃべる側になるとは」と笑う。

そして、2008年10月10日の開局と同時に、1年前から温めてきた、つくばの学生と市民の架け橋となる番組「TURN」の放送を始めた。自身もプロデューサーとして生放送に立ち会い、「無事に放送が始まった時は感激した」と話す。

念願だったラジオ局が開局し、自分たちの番組も作れるようになった。そんな中で「自分の持つ番組もノウハウも全て引き継ぎ、番組がずっと続くようにしなければならない」という使命感が湧いた。そして現在、後輩の育成と自身の持つ権限の移譲を少しずつ進めている。

「TURNはまだ可能性を秘めている」と尾形さんは話す。市民側の反響はあるが、学生からはまだまだ少ない。学生が情報収集の場としても、情報発信の場としても、番組を活用していくことで、番組の意義、良さ、質の全てが向上出来るという。

「ラジオつくばもTURNも、まだスタートラインに立ったばかり。でも自分はもうバトンを渡す所へ来ている」と話す。偉大なラジオのフロンティアは、後輩たちの成長を見守りつつ、もう少しマイクを握り続ける。（本紙・光安素子＝人文学類）

◆「TURN」は毎週金曜日21時半―23時放送、FM84・2メガヘルツ。リクエストはturn@fm842.jp まで。

関東大学バスケットボールリーグ

10月3、4日に開催

つくばで関東大学バスケットボールリーグ戦が開催される。開催されるのは男子の試合で、10月3日は午後2時40分から、4日は午後1時40分から本学総合体育館バスケットボール場で専修大学と対戦する。

入場料は一般1000円、中高生500円。本学学生・教職員は学生証・職員証の提示で無料になる。

編集後記

この夏休みには、世界各地の特派員となる部員が続出しました。イタリア、フランス、エジプト、フィリピン……。チェコ支局から戻った記者も。皆充実の夏休みを過ごしたようです。

1面の筑波おろしでは、Tくんが夏のアツい体験を披露。この夏、彼はまさに「きりきり舞い」でした。

「桐斬舞」といえば、IBOでのソーラン節。ミニ特集を担当した記者は、ボディランゲージのみで海外の選手の取材に臨みました。後に見たIBOの試験問題（参考）、問題文すら難しい……。これを解く高校生がいるとは驚きです。

「試験」といえば、そろそろ就活の始まる時期。ということで、今号の特集では就活を取り上げることに。多くの方に協力していただき、大変読みごたえのあるものになりました。筑波大学新聞のOB・OGの皆さんを始め、ご協力いただいたすべての方に感謝いたします。（編集長＝松本典子・人文3年）

次号は**10月5日(月)**発行予定です

筑波自然図鑑

◇スイレン◇

（撮影地＝本学・兵太郎池）

夏の間、水面にひっそりと美しい花を咲かせる、おなじみの水生植物。実は、これは外来の園芸品種が野生化したもので、日本の在来種に比べ、花弁数が多く花が大きい。また根茎による栄養繁殖が出来るため、繁殖力が強い。そのため、水面の全体を覆い、在来の水生植物を駆逐することもあるらしい。このきれいな花が咲く裏では、もしかすると多数の生き物が犠牲になっているかもしれない。（写真・文＝武田浩平、生物3年、野生動物研究会）

催事

スポーツ・デー

◆**第33回秋季スポーツ・デー**

10月24、25日に本学陸上競技場などで開催される。開催種目はサッカー、キックベース、バドミントン、駅伝などの正式種目に加え、昨年も実施されたSD選手権（「密告中」など）や、学生委員会主催の大運動会なども開催される。また、フットサル大会の開催も検討されている。

申し込み期間は9月7日―10月7日。ただし、正式種目の一つである駅伝だけは9月25日までとなる。

演奏会

◆**第25回つくば国際音楽祭**

海外から著名な演奏家を招いて行われるコンサート。9月中旬から来年1月下旬にかけて、10回の公演が予定されている。9月14日には、ディーター・フルーリー、ロベルト・ノージュ、岡田博美の3人による室内楽コンサートが行われる。

財団法人つくば都市振興財団が主催し、ノバホールが会場となる。詳細はホームページ＝http://www.tsukubacity.or.jp/info/modules/tinyd2/index.php?id=6

◆**第17回天上大風―日本に恋する一日―**

年2回行われる伝統文化系サークルによるイベント。津軽三味線、和太鼓、尺八、琴などの楽器演奏や、武道、能・狂言、落語の発表、書道や生け花の展示を行う。また、来場者が伝統芸能を体験出来るコーナーやお茶席も設けられる（お茶菓子代300円）。フィナーレには複数のサークルによるコラボが行われる。

9月27日、正午から午後5時半まで。開学記念館（西ループ沿い、体芸中央棟西）にて。場所が分からない場合は一の矢・平砂共用棟前、学内循環「筑波大学西」バス停に11時40分集合。入場無料。雨天変更あり。

大学会館書籍部ベストセラー

順位	書名	著者/出版社
1	1Q84①	村上春樹/新潮社
2	1Q84②	村上春樹/新潮社
3	世界は分けてもわからない	福岡伸一/講談社
4	数学的にありえない 上	A·ファウアー/文芸春秋
5	天皇論	小林よしのり/小学館
6	数学的にありえない 下	A·ファウアー/文芸春秋
7	ころころろ	畠中恵/新潮社
8	はじめての言語ゲーム	橋爪大三郎/講談社
9	植物図鑑	有川浩/角川書店
10	神の守り人 上 来訪編	上橋菜穂子/新潮社

8月の4位、6位には第1回世界スリラー作家クラブ新人賞受賞作、アダム・ファウアーの「数学的にありえない」。圧倒的武力を持つ敵に対抗出来るのは「確率的に絶対不可能な出来事」を実現させる能力を持つ天才数学者ケインだけ。壮絶な戦いの「目的」とは何か。未曾有の不思議知的サスペンス。

催事は、成美堂出版就職書フェア、（15%オフ、9月30日まで）